

新宿発



307号

平和・協同・自然のひろば

らいてうの家

信濃に誕生！



わたしは 何のために 今ここにいるのか？

きのう言った あのことも

きょうやった あのことも

さっき思った あのことも

すべては向かう「生きる意味」の方向へ

そこに在る言葉は「しあわせ」……

わたしたちは なぜ 現在^{いま}ここににいるのか？

こどものように笑いあつたこと 泣いたこと

怒りに からだどころが うちふるえ共鳴したこと

熱く そして しつとりと語り合つたこと

すべては向かう「人間らしく生きる」方向へ

そこに在る言葉は「平和」……

ひとりひとりが「しあわせ」に生きるために

そのためになくてはならない「平和」のために

わたし わたしたちは生きている

へあごらゝは そんなひとりひとりの 応援団でありたい……

表紙	平和・協同・自然のひろば らいてうの家 信濃に誕生！	2
写真	落葉松と熊笹の林の中の「らいてうの家」	6
報告	「平和・協同・自然のひろば」らいてうの家を育てる	12
詩	朽葉	16
連載	イスラームは欧米世界に対立的なものであるのか 2	22
	戦没者慰霊祭（千鳥ヶ淵）にて	25
	アジア・アスベスト国際会議に参加して	29
いま想う	平和の共同候補を求める「7・7シンポジウム」と今後の課題	34
	めじやーなりすとのめ「働きたくても…」障害児の母たちの声	36
	沖縄から「負担軽減」も「危険除去」も真っ赤なウソ	40
	新潟から 中越大震災のその後	44
	語りかけたいあなたへ68 男性の手	46
	読書室 『フェミニズム』という命の思想	48
	『千の波 万の波』	50
	試写室 「チーズとうじ虫」	54
	ミニコミ紹介 『あごら札幌』	56
	笑って怒って11 人間を大切にせず 国ほろび	58
	TOPICS	72
	会と催し	84
	あごらのあごら	1

落葉松と熊笹に覆われた四〇〇坪。

らいてうが一九五〇年代に購入した山林が、令息の奥村敦史さんから（平塚らいてうの会）に贈られたのは二〇〇一年。現地に赴いた米田佐代子さんは、ひと目で惹かれたという。

「平塚らいてうの家」「建設予定地」——二つの標札には、あふれる祈りが感じられる。

その祈りは、らいてう生誕二二〇年の今年五月、「平和・協同・自然のひろば」としてめでたく実現した。







「らいてうの家」の玄関に飾られている雷鳥母子の写真。
らいてうのペンネームは、この鳥に由来している。
(撮影・自然写真家 森 勝彦さん)



オープン前日、ブナの苗を記念植樹。〈あごら〉からも参加しました。



「らいてうの家」をつくった女性建築士の一人が、この「家」でうれしい結婚式。



木の香のかおる部屋で「森に癒される」などの講演会を開催。

「平和・協同・自然のひろば」

らいてうの家を育てる

米田佐代子

「世にも不思議な」協同のドラマ

二〇〇六年五月、日本百名山のひとつ信州四阿（あずまや）山麓の高原に「らいてうの家」が誕生しました。今、多くの方が訪問してくださっています。

じつはこの「家」を建てるにあたって、無事成就するという確信はありませんでした。「元始女性は太陽であった」で知られる平塚らいてうですが、いまや若い方からは「なんと読むの?」「鳥のこと?」「戦後も生きていたの?」と聞かれるほど遠い存在になっています。それなのになぜ今「らいてうの家」なのか? 「記念館」や「資料館」とどこが違うのか? 長野県出身でもないらいてうの名を冠した施設を、なぜこの地につくるのか? どこへ行っても質問攻めでした。それだけではありません。「建設費五千万円は、集まるのか?」「運営経費や人手は?」「バスもなくタクシーでは莫大な運賃がかかるところにどうやって行くのか?」という疑問や反対意見も続出、途中で何度も「もうだめ」と思いました。

けれども二年間かかって「家」は生誕百二十年の今年、予定どおり完成しました。募金もじっさい

には建設費が予算をオーバーしたため借金のがこつていますが、千円から百万円単位まで三千人以上の方からの募金により当初の目標を達成したのです。そこには「らいてうさんが呼び寄せた」としか言いようなない多くの人びととの出会いがあり、「世にも不思議な」協同のドラマがありました。建設責任者をつとめた（ほかに引き受け手がなかった？）わたし自身、この経過のなかから、あらためて「らいてうの家」が何をめざし、何をしたらいいのかを再発見したというのが実感です。

ここにその経過を報告し、「らいてうの家」のこれからについての展望を述べたいと思います。ただしこれは建設の中心となった〈NPO平塚らいてうの会〉の公式見解ではなく、春夏秋冬と現地に通いつめたわたしの、いわば「勝手連」的思い入れですが

「らいてうさんはいつ来るの？」

率直にいうと、わたしにとつてらいてうは、「尊敬」というより少々おちゃめで、思ったことをすぐ実行し、そのため失敗も多々あった「愛すべき人間」です。しかし『青鞥』の時代からこのかた、彼女はしばしば「雲の上」の存在として扱われ、その真の精神はなかなか理解されてこなかったのではないかと。いや、今もおおいに「誤解」されているのではないかと、という気がします。そのこと自体、歴史のなかで女性がどう扱われてきたかというジェンダー問題をあらわしているといえるでしょう。丸岡秀子さんはらいてうへの弔辞のなかで、らいてうの精神を「埋葬しない」といいましたが、わたしもらいてうの外面や言説だけではなく、その「こころざし」を正當に理解したいと考えてきました。ですから、らいてうのご遺族から「一九五〇年代にらいてうが買い求めた山林」を寄贈してください

るというお話があったとき、「なぜこんな不便な山のなかに？」と思いつつ、カラマツと熊笹に蔽われた現地を見に行つて一目で惹かれました。じつは、らいてうと同じころ、ここに別荘用地を求めた人びとは「何もない」この地を愛し、「平和・静穏・哲学」をモットーとしていたのだそうです。まことにここは「約束の地」であつたと思ひました。

背中を押してくれたのは、地元真田町（二〇〇六年三月に上田市と合併）と上田市の「平塚らいてうの会」のみなさんです。「らいてうさんはいつ来るのですか？」と問いかけるみなさんがいなかったら、「家」は実現しなかつたでしょう。

「女性九人衆」と「森のクマさん」

設計は地元から総勢九人もの女性建築士が集まり、通称「猿プロジェクト」を結成して担当してくださいました。その団結と行動力は、地元ではちょっとした語り草になっています。

このとき、会の活動に協力してくださつていた地元の林業士（通称「森のクマさん」）から、「日本の山が荒れて水害や地すべりが起こり、クマまで里に出てきて殺されるようになったのは外材や新材に押されて国産材がつかわれなくなつたからだ。木造の家ならぜひ国産材を、できれば長野県産の木を、いやここ真田の山林から顔の見える木を切り出して建ててはどうか」と提案され、「では県産材を使いましょう」ということになつたのです。建設にあたつた上田市内の業者も「木材は支給」という条件をいやな顔ひとつせず了解してくれました。

切り出した木の製材乾燥はもちろん、必要な県産材を提供しようという木材会社も現われました。

少しでも安い木材を探して「山の木がみんな柱に見える」思いで駆け回った「獺」のみなさんと、「お金がないのですが」と会社に頭を下げに行き、「女性がこんなになんばっているのに、男たちが協力しないわけにゆかない」といわれたときは涙が出ました。「らいてうさんは太陽だ」とほれこんでくれた男性たちの協力は、この後も整地や草刈りなどまであらゆるシーンでひろがります。壁や床も無垢の板張り、窓枠や雨戸も一部を除きサッシではなく木製、椅子やテーブルなどの家具もすべて県産のカラマツで手づくり、という贅沢も、デザイナーの協力と大口の寄付で実現しました。暖房も石油やガスを使わず、間伐材を燃料とするペレットストーブ（信州モデル）の寄贈を受けました。

らいてうの原点に立つて

どうしてそこまで「木」にこだわったのか、今考えても不思議です。ただ、わたしはずっと「らいてうの原点」にある「自然」を生かそうと考えてきました。「木」はいわばその象徴だったのです。

らいてうは、若い日の「塩原事件」で「心中未遂」と騒がれたとき、かつての「海賊組」の親友、小林郁を頼って東京を逃れ、信州に三か月ほど暮らしたことがありました。そのときの体験が、後に『青鞥』誌上に美しいエッセイとなっていますが、そこで彼女は日本アルプスに感動、「信州人は幸福だ」と書いています。「日輪、山岳、大洋、大河、森林」などの自然にひざまずいた原人こそ人間本来の姿だ、と思うらいてうは、やがて自らまっ白な羽毛に包まれた雷鳥に化身して空を舞う幻想を抱きます。この「自然と一体化する自己」という発想は、やがて彼女の広大な宇宙観につながり、試行錯誤を経て戦後日本国憲法第九条のいう「戦力不保持（非武装）・非交戦」という平和構想の思

想的基盤になつてゆくのですが、その原風景が信州の自然にあつたことは偶然ではないと思います。わたしたちは、伐採させてもらつた森に、ブナの苗を植えることにしました。らいてうがしばしば色紙に書いた「無限生成」のことばどおり、わたしたちの身体はいつか消えても、木は無限のいのちを受けつぎ森をつくつてゆく、そのいのちを戦火や災害に奪われないように育てたい、と思つたからです。長野県からの助成金（コモンズ支援金）を得て、「キノコの話」「太陽の木カラマツ」「森に癒される」「女性林業士と語る」などの講演会も実施、秋には近くの薬草園（三万坪もある！）の散策やキノコ鍋も計画中です。

「気持ちのいい休息所」に

標高一四〇〇メートルを越える高原に、各地から訪れる方は、老若男女、外国人をふくめてさまざまです。みどりの風と陽光を浴びてゆつたり時を過ごす人も少なくありません。

その方がたといろいろなお話をしました。閉館間際に見えていつまでもベランダの椅子にすわつていた方は養護施設からの帰りで、その子どもを里子として受け入れているのだそうです。お年を召したご夫婦とお茶を飲みながらお話ししました。奥さまは「東京の下町からね、信州に逃げてきたの」といいます。もしや、と聞いてみると東京大空襲で家族を亡くされた方でした。現職の教員で病に倒れ、「まだ自分を受け入れかねているのです」といいながら、リハビリのために杖をついてここへ来てくださった方もいました。そうして時には地元会員みなさんが持ち寄つたつけものやトマトがお茶うけに振舞われたり、信州名物「おやき」の、我が家ふう自慢話に花が咲くこともあります。九人の女

性建築士のひとりとは、「自分が精魂込めた仕事を親や先生にみてほしい」と、ここで結婚式を挙げました。らいてう講座や源氏物語講座、子ども向けパネルシアターなどの行事も取り組まれています。

らいてうは、第一次大戦後新婦人協会を立ち上げるとき、働く独身の女性や苦学している女学生のために「気持ちのいい自由な休息所をつくりたい」と考えていました。かたちはちがいますが、ここが男女を問わず人びとがつどい、学び、話し合い、そして心やすらぐ場になれば、それは、らいてうのこころざしを生かす道ではないでしょうか。運営費のめどは立っていないけれど、もう後戻りできません。

「憲法を守りぬく覚悟」を今

そして「らいてうの会」では、「家」のオープンと生誕一二〇年記念をしめくくる行事として、二月九日に東京で「いのち・愛・平和——平塚らいてう『憲法を守りぬく覚悟』に寄せて」と題し、女性の平和運動史に詳しい杉森長子さんや、国立市長上原公子さん、憲法学者小沢隆一さんらによるシンポジウムとサキソフォン演奏家中川美保さんのコンサートを行います（連絡先 〇三・三四〇一・六三八三 平塚らいてうの会）。二月八日は日米開戦六五周年です。今あらためて非武装・非交戦の日本国憲法を守りぬくためにみんなで力を出しましょう。らいてうの家がそんな「平和・協同・自然のひろば」になることを願いつつ、今は「家」に通いつめています。どうか心ある方がたのご支援をおねがいします。維持会費は年額一口二〇〇〇円からです。

（女性史研究者・らいてうの家館長）

朽葉

堀場清子

「タカモンサンの死」を書きながら
痛切な悔いがあつた

そのころ子供だったにせよ

いつも優しく遊んでくれて 早世した叔父の履歴を
ほとんど知らないままに來たのだった

問い合わせすべき年長の親族は すでに亡く

弟と話しあってみると

〃三島の砲兵隊〃だけ 記憶が一致した

知る人はいなくとも

戦病死に至る記録は

オオヤケにはあるはずだった

カミとなつて祀られていると聞く 靖国神社に

まず電話をかけた

たどたどしく説明するのへ押し被せて いきなり

「階級は？」ときた

さあ階級は……中尉くらいか 戦病死して大尉になったか

そういうことなら 防衛庁に聞きなさい

靖国神社には 一切資料はありません

で終りだった

防衛庁は 目黒の防衛研究所だといった

その戦史部資料室は

それなら出身地の愛知県に聞けといった

愛知県庁は民生部障害援護課の

兵籍簿の係が行き着く先らしかった

「そういう資料は全然ありません」

と係はいった

「敗戦の時 占領軍の軍人狩りを心配して

資料は全部焼いたのです ですから

何も残っていません」

おそらく

焼いたのは愛知県庁だけではあるまい

何十万人か 何百万人か

「お国のために」不本意な死を死んだ男たちの

わずかな生の痕跡までが

むざむざと灰になったのだ

朽葉のように掃き寄せられ

火をかけられ

烏有に帰した魂魄の叫びを

その時 わたしはたしかに聴いた

(詩集『延年』より)

〈新連載〉

イスラームは欧米世界に対して 本来対立的なものであるうか²

久山 宗彦

イラクの民主化が、イラクの弱体化か

イラクを民主化させるとか、サッダーム政権の圧制に苦しんだイラク人を解放し救済していくとか、これらの方向に米英首脳陣が徹しようとしているのであれば、実に素晴らしいことであるが、実態はどうも生臭いものを感じる。中東・北アフリカ地域をよく眺めてみると、アメリカは本場の民主化を求めることなく、エジプトを自国がコントロールする国に徐々に仕立てていつているし、サウジアラビアも、友人の東京のサウジアラビア大使館員T氏が語るように、かつてのサウジの姿勢とは随分違って、今はもうアメリカのご機嫌をうかがわないうまくいかない国になりつつあるようである。さらにヨルダンもそのようで、この次はいよいよイラクの番であるようだ。

既述したように、イラクを本当に民主化させていくのであれば、これは大半のイラク国民も願ったリ叶ったりのことなのだが、イラクという国は、イスラームをベースにした国民それぞれの判断・選択（イジュティハード）による、つまり、民が真に主となっていく民主化をほとんど重要視することなく、欧

米の民主主義制度をそっくりそのまま入れ込む、いわゆる欧米化とか世俗化された民主主義へと指導されていくのであれば、イラク国民の大半はそれに反対を表明するはずである。民主主義はそれぞれの国の宗教的・文化的伝統にしたがつて、運用面で違いが出てくるのは、もちろん、当然のことと思う。

狙いはパレスチナ人たちの追い出し？

いずれにしても、これまでの経過から判断すると、米英首脳陣の頭の中には、イラクを、要するに弱体化させていかねばならぬというのがあつて、そしてそれはその先で何を狙っているのかと言うと、パレスチナ問題を何とかしようということではなからうか。

パレスチナ問題ということになると、当地にあつて良きにつけ悪しきにつけアメリカと極めて密接な関係をもったイスラエルを登場させねばならない。実際、イスラエルに出掛けてみると直ぐ分かることだが、やることがアメリカと本当によく似ているのである。小さなアメリカ、あるいはアメリカの出先機関がここに出来ているというふうに感じてしまうのである。エジプトへ行つても、ヨルダンに行つても、またシリアへ行つても、イスラエルのテレビを見ることができるが、それぞれの現地でテレビを見てみると、イスラエルは本当にアメリカではないかと率直に感じてしまう。

アメリカに住んでいるユダヤ人は、かつてのホロコーストを何とか逃れて難民となつてアメリカに渡った人たちやその子孫であり、かれらの苦しみは大変なものであることはよく理解しているつもりである。したがつて、イスラエルをアメリカが支持し擁護していかねばならないというのがこれまでの状況であろう。ホロコーストで本当に苦しんだユダヤ人たちが何とか安定していつてほしいと同情

したアメリカは、ユダヤ人たちから、パレスチナの地においてヤーヴェがアブラハム（イブラヒム）を通して約束して下さった神の国の再建を出来るだけ早くはじめたいと懇願されたとき、その国が実現できるよう、いろいろと努力したわけである。もちろん、イギリスはこの神の国建設の機会を活用して、ヨーロッパ等で長期にわたって問題になっていた、いわゆるユダヤ人問題を一挙に解決したいと、イスラエルの再建には大賛成であった。何はともあれ、イスラエルはアメリカと本当に一体となっている国である。

話を元に戻すが、アメリカとイスラエルは、イラクを弱体化させることによって、結局、イスラエル内にいるパレスチナ人を追い出したのではなからうか。

パレスチナ人は自分たちだけではきちつと生きていけない状況に永い間置かれていて、イスラエルではもちろんのこと、アラブの国ぐにでも欧米の国ぐにでもそうであるが、頼りながらでないと生きていけないのである。本来は頼れる国であったのが、一九四八年以降、イスラエルによって、「頼らないと生きていけない状況」へと誘導されていったのである。今後まだまだ紆余曲折があろうが、イスラエルはここにどつかと強力な独立国家をつくって、最終的にパレスチナ人を追い出していこうという凄いい発想が、アメリカ・イスラエル側にあるということだ。言い過ぎのように聞こえるかもしれないが、イスラエルのシオニズムの姿勢は、決して生半可に妥協したりするようなものではなく、またこれを支えてきたのは、世界のあちこちに散らばって、ことばの違い、考え方や感覚の違いはいろいろだが、共通して自分たちの国を堅持していこうとするほとんどのユダヤ人なのである。

しかも、パレスチナの地というのは、既述したように、自分たちの父祖、アブラハムにヤーヴェは約束なさって、子孫にこの地を提供して下さったのであるから、威厳を持ってここへ堂々と帰ってい

つたらよいというふうにユダヤ人たちは考えているのである。

今日に至るまでイスラエル政府は国境はどこからどこまでであるか確定していないし、世俗国家がいいのか神政国家がいいのか、こんなことも何も決めていないのであるが、決定的なことは、要するにここで強力なユダヤ人のための独立国家を堅持していくということだ。周りにパレスチナ人や多くのアラブ国家があつて、一緒になつてイスラエル攻撃をしてきたとしても負けない国を目指しているのである。背後にはもちろんアメリカの支えがあるから、これは可能であろう。

第二、第三のユダヤ人は大歓迎

ところで、イスラエルという国は、何も外国人の受け入れを否定しているわけではない。パレスチナ人、アラブ人、いろんな外国人、そして日本人までも、イスラエルでユダヤ人と生活を共にしているが、かれらが自分たちユダヤ人のやり方をよく理解してくれて、第二のユダヤ人、第三のユダヤ人となつてイスラエルの国造りに励んでくれるのであれば、これはもう大歓迎ということになる。

これに対してパレスチナ人は、自分たちが住んでいるパレスチナの地にテロ行為を起こしながら入つてきたユダヤ人を許し、そこをイスラエルという国にしてしまったことまで、すべて譲歩し、諦めていくにしても、アツラーのもとでパレスチナ人もユダヤ人もアラブ人も、そして外国人、日本人もができるだけ平等になつていくような国造りをしてほしいと要求し続けているのである。

これに対するユダヤ人のシオニズム観は、もちろん、ノーである。理由は、聖地パレスチナにおけるユダヤ人のための神の国建設だからということだ。それはこの地でなければならず、しかも旧約聖

書によるとその範囲はエジプトのワーデイー（ワーデイーというのは砂漠に出来た小川・水溜り、まさかナイル河ではあるまい）から、ユーフラテス河までである。ユダヤ人はそこを基本的にパレスチナの聖地と見なしていて、このようなことはパレスチナ人・アラブ人にはオープンにできないが、イスラエルのコインの中ではそのような地図が描かれている。

パレスチナ人・ユダヤ人の父祖、アブラハムの謙虚さ

イスラエルでは独立国家を守っていくためにはできるだけ領土を拡大していかなければならないという考え方が一般的であるが、しかしながら、何度も指摘しているように、そのような土地はヤーヴェからユダヤ人が尊敬しているアブラハムを通して与えられたわけである。

一方、アブラハムについては、ユダヤ教徒ばかりでなく、キリスト教徒もイスラーム教徒も心から尊敬しているのであり、特にイスラーム教徒たちは、イスラームはアブラハム（イブラヒーム）の宗教に戻る宗教だとまで言っているのである。

ところで、イブラヒームは、イスラエル再建当時のユダヤ人が高姿勢でどやどやとパレスチナの地に入ってきた態度とはまるで反対に、現在の南イラク、ナースレイヤ近くのウルから、パレスチナにやってこられたのであるが、旧約聖書・創世記によると、かれはパレスチナの地においては外国人のように謙虚に住まわれたと、何回も記されているのである。イブラヒームは妻のサラを現在のハリールで亡くされたようであるが、妻のお墓をつくりたい時もいろいろな人たちに頭を下げて、妻のために小さな土地を提供してくれないかと実に謙虚に頼んでいる。すると周りの人たちは、ここを使つて

下さい、あそこを使つて下さい、と申し出てくれたという。

パレスチナという外国で、外国人として極めて謙虚に暮らしたアブラハムの素晴らしい姿勢は、現在のイスラエル・アメリカに果たしてあるであろうか。答えはノーと言わざるをえない。アブラハムを自分たちの父祖、お父さんとして、心から尊敬しているのであれば、イスラエルのパレスチナ人に対する常日頃の傲慢な姿勢をアブラハムに倣つて謙虚な姿勢に改めるべきではないか。それと同様に、アメリカもイラクに対する傲慢な姿勢を改めるべきである。イラクでは今なおテロ行為が頻発している。それらは全く許しがたいのであるが、私は、アメリカの、イラクばかりか、世界各地への突如たる軍事派遣の問題は、テロ行為以上に大きな問題ではないかと思つてゐる。

言うまでもなく、モスレム・クリスチャンであるパレスチナ人もイラク人も、徹底的にアッラーに帰依し、極めて謙虚であつたイブラヒムを、自分たちの鏡として心から尊敬・信頼しているのである。イスラームは内面的な謙虚さを最も大事にしている宗教だと言えよう。パレスチナ人にしてもイラク人にしても、外国人であるユダヤ人やアメリカ人が謙虚な姿勢で振舞うならば、自分たちも本当に謙虚に対応したいという気持ちは充分あるのである。私はこのところは非常に大事な問題だと思つてゐる。

最初に触れたように、米英首脳はイラクの民主化とか、イラクの救済について、ある程度の成果を挙げていくであろうが、その裏では伝統的な十字軍的態度が散見されて、狙いは、イラクを弱体化させることによってパレスチナをさらに弱体化させ、最後にはパレスチナ人をイスラエルから追い出したいという姿勢であると、私は強く感じるのである。

(カリタス女子短期大学学長 神奈川県私立短期大学協会会長 日本・中東アフリカ文化経済交流会会長)

いま 想う

戦没者慰霊祭〈千鳥ヶ淵〉にて

福島 みずほ

わたしたちは追悼する。戦争によって苦しんだ諸国民を。日本人で亡くなった三〇〇万人以上の人たち、そして、アジアで亡くなった二〇〇〇万人以上の人たちを。

わたしたちは追悼する。日本の空襲で、また外国の土地で亡くなり、そして、戦争末期には、自殺せざるを得なかった民間の人たちを。ヒロシマ・ナガサキの原爆で殺された人たちを。中国や南方などで置き去りにされ、また、逃げる途中で亡くなった人たちを。召集令状で徴集され、戦場に赴き、異国の地で、戦争で、そして餓死などによって命を奪われた兵士たちを。特攻隊として、自ら命を断った若い人たちを。シベリアなどに捕虜として抑留され、戦争が終わった後にも死んでいった人たちを。

わたしたちは追悼する。わたしたちの国の侵略戦争で殺された人たちを。朝鮮半島から、徴兵され、軍人・軍属として、命をなくし、あるいは強制連行によって死んでいった人たちを。いわゆる従軍慰安婦として戦場で死んでいった人たちを。治安維持法により厳しい弾圧を受け、政治的・宗教的な理由により、拷問死あるいは獄中死した人たちを。

わたしたちは追悼する。世界の戦争で殺された市民、兵士たちを。戦争に反対をしたために、殺されていった人たちを。国、民族、宗教、信条などの理由から、命を否定された人たちを。そして、今

このときもイラクで、そしてレバノンで戦闘が続き、罪のない市民の命が失われていることを。
わたしたちは、いかなる理由からも「国のための死」を繰り返してはなりません。

日本国憲法前文は、「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する」と述べています。

政治の大きな役割は、戦争をしないようにすること。主権者に求められるのは、戦争をしないための政治をつくることです。戦争をしないと定めた憲法は、皆さんの尊い命と残された人びとの切実な思いの中から生まれました。それは戦後日本の出発点であり、この国の背骨であり、アジアに対する、世界に対する、わたしたちの公約なのです。

しかし、今、このことを否定する政治の動きが強まっています。

これまで解釈改憲を積み重ねてきた人たちは、米軍再編のなかで米軍と自衛隊の一体化をすすめ、横須賀を原子力空母の母港にし、米軍が展開する世界の戦争に自衛隊が共に戦うことを可能にするために、明文改憲しようとしています。

共謀罪、教育基本法改悪法案、憲法改悪国民投票法案が継続審議となっており、いずれも人の心の中を管理し、憲法改悪に直結するものです。

憲法を変え、こどもたちに国策に従うための愛国心を教育し、「戦争で戦死した軍人」を神としてまつる神社に政府高官が参拝することは、この国をどのように変えるでしょうか。

本日、小泉首相は、国内外の多くの反対を押し切り、靖国参拝を強行しました。八月一五日は、平

和を心に刻み、国内外で平和の誓いを共有する日です。その八月一日に、政教分離を踏みにじり、靖国参拝を強行した小泉首相に、強く抗議をします。

安倍官房長官も今年の春、参拝しています。このような行為は政教分離を定めた憲法を自ら踏みにじるものです。

命以上に大事なものはありません。その何よりも大事な命を国のために投げ出すことを美化し、このような考えをこどもたちに植えつけようとする発言が、政治家から出ています。

国をあげて戦争をしないことを宣言し、世界の戦争をやめさせていくことで、命を大事にするのか、それとも憲法を変え、戦争のできる国にし、そのために、愛国心を教え、国のためには、命を投げ出すことが命より大事だと教えるか、まさにそのことが時代の岐路として、今こそ問われているのです。

小泉首相たちの靖国参拝は、新たな「国家による死」を迎える時代を準備しているのではないでしょう。わたしたちは八月一日を、「平和を心に刻む日」から、再び「国のために死ぬ誓い」の八月一日に変えてはなりません。

「生きたかった」戦争で亡くなったみなさんと遺族の方々の底知れない悲しみとそして深い怒りは、わたしたちに、二度と戦争をするなと語りかけています。

「国家による死」が繰り返されないために、どうか戦争で亡くなったみなさん、わたしたちに、憲法9条を変えさせないために力を貸して下さい。

いま 思う

アジアアスベスト国際会議に参加して

阿部知子

世界も日本も暴力だらけ

国会議員になって六年、はたして自分のやるべき仕事は何なのか、いつもいつも考えてしまいます。もちろん選挙の時には公約やマニフェストを掲げますから、そこで語ったことに添う仕事をと、日々最大限努力はしています。でも最近の政治状況をみると、悲しくなったり、怒り心頭に発することばかり。

二つの世界大戦の教訓の上に成り立つはずの二一世紀は、アメリカによる相次ぐアフガニスタンやイラク攻撃ばかりか、イスラエルのレバノン侵攻によって、ますます報復と暴力の支配する世界になるうとしています。もちろん北朝鮮やイランの核開発やミサイル問題も米国の自己中心的覇権主義が、核兵器も含めた軍拡を押し進めるところとなった結果でもあります。「目には目を、歯には歯を」の論理ばかりが幅を利かし、国連はこうした状況に機能するどころか、むしろ弱体化の一途です。

そして日本の国内でも北朝鮮問題や靖国参拝で高まる近隣諸国との緊張に対して、「やられたら、やり返せ」を超えて「やられる前にやれ」（先制攻撃論）へと声高になるばかり、いったい理性や人類の英知と言われるものはどこへ行ってしまったのか、その愚かしさに自分も含めた「政治家」は何

らの立ち向かう術なく立ちすくんでいるだけにも思えます。ましてや日本国内の次の総理レースが云々など、この事態にどれ程の意味があるのやら。

今ひとつの蛮行——アスベスト

そんなもやもやした気持ちを抱えながら、七月二六日から二泊三日で、タイのバンコクで開催されたアジアアスベスト国際会議に行ってきました。

アスベスト問題は、我が国でも昨年六月に兵庫県尼崎市の旧クボタ工場の周辺住民の皆さんが、四〇年以上も昔に飛散したアスベストを吸い込んで中皮腫や肺癌になったことを訴えて、社会に大きな衝撃を投げかけました。

これは、有害物質・発がん物質として単にアスベスト工場の中で働く人たちだけの問題ではありません。アスベストを含むすべての製品（とりわけ建材）の使用時や工場周辺の住民にも致死的なダメージを与える物質が、安くて使い易いという経済効率だけで何十年と使われ続け、今も個人の住宅はもちろんのこと、子どもたちの学校や公民館や病院の建物にも存在し続けている事実は、我が国にとっても今後も深刻な環境問題や社会問題になります。

日本よりは、約三〇年早く、ヨーロッパでは既に一九七〇年代の半ばには厳しい規制が敷かれました。しかし日本では工場や労働者に対する規制はザルであるばかりか、国民に対してはその危険性すら知らされずに、つい最近まで屋根にも床にも壁にも、とにかく身の回りの至るところに使われ続けてきたことは、昨年の国会でも行政への厳しい批判となりました。

グローバル化の陰で

そうしたことを受けて、日本では二〇〇八年にやっと「全面禁止」となりますが、恐るべきことに現在も中国とタイ等ではその使用量はうなぎのぼり、もちろん日本で使用できなくなったアスベスト製品が平然と輸出されていることです。

静かな時限爆弾（吸入して三〇年、四〇年経ってから癌などになるのでこう呼ばれます）は、今も、しつかり売り続けられ、アジアで発展を遂げる中国・タイ・インド、そしてロシアでも、経済成長と歩を一つにするように消費されているのです。その大きなツケが、三〇年、四〇年後に来ることは、欧米も日本も経験済み。でも誰も止めないし、もしかしたら止められないのかもしれないかもしれません。

企業も、諸々の国家も、願ってやまない「経済発展というオマジナイ」は、こうやって環境も人体も、すべてを食い尽くして、レヴァイアサンのように巨大になろうとしています。やがて人類を滅ぼすことに違いないのに。

おまけにアスベストをたっぷり使用した先進諸国の廃材解体処理は、バングラディッシュやインドの貧しい日雇い労働者が何の危険も知らずに低賃金で請け負い、女・子どももアスベストの埃だらけのその廃材を一生懸命に運んでいます。そうしたことを一体誰がやめさせられるのか、女性たちや子どもたちを守るのか。私は今回のタイでの会議を通して、アジアにおける社民主義の流れを何としてもつくりたいと心底思いました。

言葉だけの「平和」を超えて

アジアの国々が急速な発展を遂げる一方で、国内の貧富の差は広がり、また一部の豊かな国と、貧しく経済基盤の弱い国の格差は開くばかりです。

フランスの廃船が、なぜバングラデيشュで解体されるのか。危険で汚くて嫌われるものでも、従来の農業基盤や生活基盤を失われたアジアの人びとはそれを仕事とせざるを得ない現実。もちろん労働者という身分を保障するものは何もなく、言葉すら白々しいのです。七割以上は非正規、もつと言えば崩壊した農漁村から働きに来て日銭（日当）でナンボ（二ドル）です。アジアネットサンスと言われ急速に勃興するアジア。でも危険な労働から身を守る術は何もなく、労働条件など論外です。これまでのアジアの議員との交流は、主に平和がテーマで、昨年はじめて韓国のチェジュ島でアジア規模の会合（アジア平和議員フォーラム）を持ちましたし、今年九月には社民主義インターの政党会議が韓国であるそうです。そうした場で、もつともつとアジアの人びとの働く実態や生活実態が政治家や政党によって語られる必要があると思います。

アジアは今変わろうとしています。かつての農業国、第一次産業中心の国々は、工業そして第三次産業の波に急速に洗われて「欧米化」しようとしています。しかし多くの国では労働組合はもちろんのこと、医療をはじめとするセイフティネットもほとんどありません。

今こそアジアでしっかりと社民主義（人間の生存のため安全と安心の構築）の流れが必要な時です。そうした交流を、今年、もしもアジア平和議員フォーラムの会合が行われるなら、提案してみたいと思います。

ちなみに来年のアジアアスベスト会議はベトナムだそうです。ベトナムの復興が本当に人びとの幸せな姿となるよう、さらにまたアスベスト廃絶を訴える流れを強くしたいものです。

いま 想う

平和の共同候補を求める「7・7シンポジウム」

と今後の課題

きくち ゆみ

「〇七年参院選・平和の共同候補を求めて 7・7シンポジウム」が東京一橋の教育会館で七夕の日に行われた。幕を開けるまで、約千人が入る広い会館がいっぱいになるのか不安だったが、準備に携わった一人一人の努力の結果、立ち見が出る程の入りとなった。ここに辿り着くまで紆余曲折はあったが、集客、内容ともに充実した集会で、なんとか「平和への結集」への第一歩を踏み出した。これが一つ目のハードルで、これからいくつものハードルを越えなくてはならない。

第一部のパネリストの発言

私は第一部のパネルディスカッションの司会を担当した。この日、パネリストとして登壇していたのは、国立市長の上原公子さん、元衆議院議員の川田悦子さん、ジャーナリストの斎藤貴男さん、評論家の佐高信さん、音楽評論家で作詞家の湯川れい子さんの五人。

湯川れい子さんは、六歳のときに海軍にいた父親を亡くし、続いて一番上の兄を失い、二番目の兄も学徒出陣で特攻隊長として行方不明となった（後、奇跡的に帰還）体験から、「憲法を守るのはイデオロギーでもなんでもなく、平和を求めるのはあたりまえのこと。今、失ってこわいものは9条以

外に何もない」、と発言。彼女はペンクラブ9条の会、音楽家9条の会、女性9条の会などでも活動している。「もつと著名人が名前を出せるようにウイングを広げたい。創価学会の人や自民党の中にだって憲法9条は変えたくないという人だっているはずだから、どんどん声をかけ、働きかけていきます」と幅広い人脈を持ち、活動をしている彼女らしい提言をした。

続いて、佐高信さん。「大学教授は干物、そして実際の政治に関わる人は生もの。生ものは灰汁があるけど、その良さがある。無党派が良くて、政党の人が遅れている、という考えでは結集できない。生ものの灰汁をほぐしながら、押しくらまんじゅうのように、押したり引いたりという動きを生もの世界でやっていく必要がある」と訴えた。

斎藤貴男さんは、「もともと保守系の新聞社や雑誌にいたけれど、今の（戦争に反対するやつ、左翼は許さない）というマスコミの風潮は、イラクの人質事件以降、ますます強くなっていることを実感。しかし経営者9条の会が結成される動き（月刊誌『創』に斎藤さんが書いた）もあり、これまで日本で実現してこなかった9条を実現するのはこれから。9条は沖縄にはなかったし、今もない。私たちに必要なのは寛容」と主張した。

団塊世代を知らない斎藤さんは、「いまだに昔のことでもめているのが不思議。平和を願う立場の者同士が喧嘩をしている場合ではない」と発言すると、会場から拍手が湧いた。

川田悦子さんは、「最初の選挙のときには共産党が候補を降ろし、社民党は候補を出したけれどあまり応援しない、という形で私を応援してくれた。二回目の選挙のときは、マニフェスト選挙で二大政党の論議の中で、負けた。衆議院議員をやめてからもう二度と政治には関わらないと決めて、今は長野で自給自足の暮らし。一人の母親として、薬害エイズで子どもたちが黙って、やせ細って死んで

いくことに黙っていられたかったので、息子の龍平の実名公表を支え、これまでやってきた。弱者が声も出せないまま殺されていく構造は根が深く、そこから変えなくては」と発言した。

弱者が声を出せないまま殺されていく、というのは、まさに戦争そのもの。そういう意味で、日本にもすでに「戦争」の構造がある。川田さんのお話を聞いていたら涙が出て、一瞬、司会ができなくなった。

最後の上原公子さんは、市民が全面に出て、後ろから社共が共同して応援して当選させたおそらく初の市長、とのこと。「平和への結集に必要なのは、日常的にできることは何でも幅広く声をかけて一緒にやるのが大事」と提案。上原さんは最近「国民保護計画が発動される日」という本を出したが、「現場ではもう憲法がないようなことが進行していて、日々市長として戦わざるを得ない状態が続いている。『憲法9条を守ろう』では守りきれないので、できることは手段があれば、何でもやっている。無防備条例運動はその一つ」と、具体的な提案をたくさんいただいた。

また、多くの人からパネリストの発言が素晴らしかった、もっと聞きたかった、人選がよかった、というコメントもいただいた。

それぞれの場で活躍するパネリストからの平和への結集に対する貴重なご意見やアドバイスをいただいた。これらを真摯に受け止めて、どこまで広範な市民のネットワークを広げられるかが、私たちに問われている。

「憲法9条を守る」という運動では、すでに全国に五〇〇〇以上も支部ができています。「9条の会」をはじめ、「憲法9条行脚の会」、そして「第9条の会」などの市民運動があるが、同じ9条を守る目的なのにそれらの結集がされていない。市民同士が結集できなくて、どうやって政党に結集を促すことができるのか。

薬害エイズ問題のときは、まず患者自身（子どもたち）と家族、それから市民、とくに若者が動き、次にマスコミが動いたら、政治家がついてきた。平和への結集もきつと同じだろう。私たちが自分の家族や友人に声をかけ、広げていくのが基本だ。また、日常からできることは政党に関係なく幅広く声をかけてやること、佐高さんの言う「生もの」と「干物」の協力体制、経営者9条の会や全国の9条の会などの動きとの連携、創価学会や自民党、無党派層の「戦争はいやだ」という人たちまでウィングを広げることも大事だ。

これほどの方々の発言をわずか一時間しか聞けない、というのは本当にもったいなかった。平日の夜のシンポジウムという限られた時間の中では、仕方がないか。

立ち上げれ、平成の五平たち！

第二部は神田香織さんの「井戸掘り五平」の講談。天明三年の浅間山の噴火で、井戸が涸れて村が存続の危機に陥っていたとき、父から遺言を受けた井戸掘りの五平が、村人にバカにされながらも井戸を掘り続け、ついに八年後に父親の墓下に井戸を掘り当てて、村を消滅の危機から救った、というお話。日本の平和憲法が危機に直面している今、七夕の日に全国から集まった一人一人が現代の五平かもしれない。

平和の共同候補を求める運動は、これまでさまざまな市民運動が実現できなかったことを目指すのだから、多くの人から批判され、バカにされることもある。しかし、あきらめずに、愚直に、命の水である憲法を守り続けようではないか。神田さんの講談を聞いて、大いなる勇気をいただいた。

第三部では広島、大阪、徳島、沖縄、岡山、東京の各地での平和の共同候補擁立へ向ける取り組みが報告された。

最後の大会アピールは、千葉大学教授で、『平和への結集』をめざす市民の風』の共同代表である小林正弥さんが提案をした。まず、改憲が切迫している流れを阻止するために、二〇〇七年の参議院選挙が決定的に重要であることを認識し、この選挙を改憲阻止選挙とすべく、市民の参加を求めること。これまではらばらだった護憲勢力を一つにまとめて、9条改憲を阻止して、憲法を活かす平和の共同候補の擁立運動が広がっていけば、現在の流れを逆転できるかもしれない、と訴えた。

そのためにも多様な形態での共同の実現をアピールした。沖縄の参議院選挙で実現したような共同候補を目指し、比例選挙での共同リストの形成も選択肢の一つだが、7・7に集まった人びとは、支持政党や立場もさまざまなので、それぞれの立場で最大限の努力をすることが確認された。

なお、このシンポジウムに参加できなかった人びとのために全記録をまとめた『〇七年参院選・平和の共同候補を求めて——7・7シンポジウム全記録集』が発行された。読み返すと、あのときの熱気が蘇ってくる内容で、各地での取り組みに役立つことだろう。一部四〇〇円で配布しているので、希望者は筆者までメールかファックスで住所、氏名、電話番号を添えて、申し込んでほしい。

メール yunik@fine.ocn.ne.jp

ファックス 04-7097-1215

〔平和への結集〕をめざす市民の風・共同代表

「働きたくても…」 障害児の母たちの声

片山 佐和子

(かたやま さわこ 河北新報社 報道部 記者)

「状況は変わってないです」。電話口から無念そうな声が聞こえた。

仙台市北部の大和町に住む佐々木淳代さん。娘で六歳の莉那ちゃんは、重度重複障害があり、今年四月、自宅から車で四十分かかる利府町の利府養護学校に入学した。てんかんの持病のため、無償のスクールバスを使えないうえ、佐々木さん夫妻は共働きで毎日の送迎が難しい。地元小学校の通学も含めて検討したが、納得できる方法は見つからず、利府町の福祉施設にデイサービスによる送迎を依頼した。義務教育なのに、月一万三千円の自己負担が生じたのだ。サービステマが変わる十月以降は一万八千円に上がる見込みだ。

「保育所、まだ待機中なんです」。こちらは佐々木さんの友人で、同じ町に住む高野千秋さん。町立保育所には重度重複障害の娘・紗希ちゃんを優先的に受け入れる枠がなく、パートタイマーの高野さんは「保育に欠ける要件」の優先順位が低い。町内に就学前の障害児が通う場所はなく、仙台市内の通園型療育施設へ週二回通う。莉那ちゃんもこの施設の卒園生だ。

佐々木さんと高野さんは、今年三月、村井嘉浩知事に障害児を育てながら働く母親の現状を訴えた。「スクールバスへの看護師同乗」や「送迎費の助成」、全公立保育所での「障害児枠の設定」「常勤看護師配置」などを求め、要望書を手渡した。大和町長にも、町の教育環境改善を訴えた。佐々木さんに対し、県教委は「通学が難しい場合は、自宅に教師が出向く訪問学級もある」と勧めた。県教委はスクールバスが使えない場合、保護者に送迎のガソリン代を補助している。有償運送事業許可を得たNPO法人の送迎も対象内だが、佐々木さんのケースは福祉の範ちゅうに入るとして、制度上、支援できないという。

「障害児の母親は働いちゃいけないの?」。当時、納得できない思いを抱えて原稿を書いた。

宮城県は昨年七月、重い障害があっても地元小中学校の普通学級で学ぶ教育を目指して「障害

「児教育将来構想」を策定した。障害のある小・中学生二十三人をモデルに、補助教員や看護師の配置、校舎のバリアフリー化なども進め、教育環境を整えた。

制度の壁が理由とはいえ、通学可能な莉那ちゃんに、同世代の友だちから切り離される自宅学習を勧める県。誇らしげに掲げた理念を、自ら否定する行為ではないだろうか。

「佐々木さんのようなケースは初めて」。県の担当者は言った。しかし、厳しい現実を前にさまざまなことをあきらめ、退職せざるを得なかった母親たちは、星の数ほどいるはずだ。一つ一つの制度が、仕事を持たない母親の負担を前提にしており、シングルマザーや共働きをしなくては生活が成り立たない家庭、フルタイムで働き続けたい女性への配慮は見えない。

働く女性でつくる市民グループ「BPW仙台クラブ」は、このほど、「知的障がい児の母親の社会参画に関する調査報告書」を出した。せんだい男女共同参画財団の助成を得て、メンバーが一年かけて調査、考察した力作だ。就労問題も取り上げ、五割以上の母親が就労を希望しているのに、実際に働いているのは三割弱という現状を明らかにした。「こういう状況で子どもにお金がかかるので本当は働きたい」「子どもは学校を楽しみにしているのに、わたしの体調が崩れると送っていけない」など、母親たちの切実な声が数多く収められている。

調査した深野せつ子さんは、「お母さんたちの当たり前の人権が守られていない。こんなに大きな問題なのに、仕方ないとあきらめ、声を出すことを遠慮してしまう」と、母親への情報提供の少なさや負担の大きさなどを挙げた。

子育てをしながら働く女性は今さら珍しくないが、「障害児の母」という役割を背負った途端、社会からブツン、と切り離されてしまう。「おかしい」と声を挙げ始めた彼女たちを、「書くこと」で応援したいと思っている。

「負担軽減」も「危険除去」も真っ赤なウソ

浦島悦子

ついに成立した米軍再編

五月一日、日米両政府は在日米軍再編の「最終報告」に合意した。

連休明けの一日には、稲嶺恵一沖縄県知事が額賀福志郎防衛庁長官と「在沖米軍再編に係る基本確認書」に合意。

名護市長をはじめとする北部市町村長が普天間飛行場の辺野古・大浦湾沿岸への移設を容認する中で、圧倒的多数の県民は、反対を貫く知事の姿勢を支持し、希望をつないでいた。しかし、知事もついに日本政府の圧力に屈し、県民を裏切ってしまったのだ。

稲嶺知事が「政府案を基本として」

協議していくことに合意した「基本確認書」を読むと、怒りがこみ上げてくる。在沖米軍再編が、あたかも

「沖縄の負担軽減」と「普天間基地の危険除去」のために行われるかのような詭弁を弄しているからだ。

全国民向けには、三兆円もの国税を使って米国の世界的な軍事支配を支える日米軍事一体化を「沖縄の負担軽減」のためと偽り、沖縄県民向けには、米軍が四〇年前に計画しながら資金不足で棚上げにしていた軍事要塞（ベトナム戦争中に策定された海軍マスタープランが、今回の沿岸案と酷似していることが明らかに

なっている）を日本のお金で造ってあげることを「普天間基地の危険除去」のためとこまかしている。実際は全く逆に、いつその負担と危険を沖縄に押しつけるものでしかない。

翌一二日午前、「基地の県内移設に反対する県民会議」が呼びかけた緊急の県庁抗議行動に私も参加した。知事の合意撤回を求める三〇人余の県民らに対して、牧野浩隆副知事は「協議していくことに合意したのであって、政府案を容認したわけではない」「県と政府のスタンスは違う」と弁明したが、「政府は容認したと受け取っている」という迫及には答えることができなかった。

モルヒネ効果の振興策要求

政府は、在日米軍再編を推進するための特別措置法を検討しているという。再編の進行に応じて段階的に交付金を増額していくという露骨な内容だ。地元紙「沖縄タイムス」の社説は、これは「アメ攻撃」をはるかに超えた「モルヒネ攻撃」だと言いつつ、そのモルヒネが早くも効いてきたのか、私たちの二見以北でも異様な動きが起こってきた。

前号で触れた二見以北区長会の「六〇億円要求」は、住民の反発が強く、さすがに恥ずかしいと思ったのか、区長らはその後、これを取り下げたが、代わりに「二見以北地域振興会」（以下、振興会と略）なる組織が振興策を要求するという。同会は、会長である田畑一茂・瀬嵩区

長の説明によれば、二見以北一〇区の各区から二人ずつ（区長プラス一人）で構成されているというが、一般住民はほとんど知らない。

振興策要求の動きに拍車をかけたのは、知事と防衛庁の「基本確認」だった。振興会では、地域全体としての要求に各区からの要求を加えたものを政府に要請することにして、したが、合意が行われた一日の夜、急いで（あわてて）話し合いを持った区が多かったようだ。私の住む区役所によると、「知事が（基地を）受け入れたので、今後は条件闘争をやるしかない」という雰囲気だったとのこと。県当局がいくら「政府案容認ではない」と弁解しても、政府はもちろん地元でも容認したと受け取られているのだ。

各区の要求の内容を見てみると、

区内の道路や橋の補修など、およそ防衛庁には関係のないこまごましたものや、リゾートホテルの建設（すでにこの地域には大型リゾートホテルが存在しているが、基地ができたなら営業不可能になるのではないかと心配されている）とか大型ヨットハーバーの建設とか、笑ってしまうような要求が多い。この際、何でもいから要求してしまえ、どれかは当たるだろうということなのか。日本政府がばらまいた悪性ウィルスによる熱病に浮かされているとしか思えない。

誤解のないように付け加えると、これらはむろん「区民の総意」ではない。ほとんどの区の役員会で振興策要求には賛否が分かれ、部落総会で話し合われた少数の区では、区民から「恥ずかしい」「命にかかわることを軽々に決めるべきではない」

「自分たちはカネをもらって、基地被害を子や孫に押しつけるなんてんでもない」「絶対に（振興策要求のために）上京するな」等々、非難と抗議が渦巻いたという。

「基地反対」が住民の総意

私たち「へり基地いらない二見以北一〇区の会」では、「区長らが振興策要求を持って防衛庁へ要請に行くらしい」という情報を得たので、これに歯止めをかけようと、振興会および各区長宛てに「代替施設建設に伴う振興策を要望しないでください」という要請文を作り、五月一八日に田畑・振興会会長に申し入れることにした。要請文では、振興策要求は基地受け入れと誤解されるおそれがあること、地域住民の総意ではない

こと、必要な振興策は当然の権利として所轄機関へ要請すべきであって、基地と引き替えに防衛庁へ要求すべきものではないこと、等を述べた。

ところが、翌日の申し入れの準備を整えた一七日夜、区長らがその日、すでに上京してしまったことがわかった。名護市の職員が同行したという。閣議決定を前に地元の同意を取り付けたい政府と名護市がお膳立てをして、急いで連れて行っと思ったと思われる。出し抜かれた私たちは、申し入れの予定だった一八日朝、急きょ、抗議声明を出し、翌一九日に各区を回って声明文を区長に届けた。

京を断念した区長もいたが、署名は取り消さなかったわけだ。

区長らは異口同音に、「政府が建設を強行したときの担保として振興策を要求したのであって、基地にはあくまで反対だ」と主張した。しかし、たとえ、それぞれの思いが「基地反対」であったとしても、客観的に見れば、閣議決定前に「地元が受け入れた」という形をとっておきたい政府に利用され、「基地容認」「基地の見返りとしての振興策要求」という誤ったシグナルを送ったことは否定できない。

地域住民と地域リーダー、市民と市長、県民と知事の間には明らかにねじれ現象がある。大小の権力に負けることなく、住民・市民・県民の意思をどうやって形にいくかが問われている。

閣議決定を廃止させよう

五月三〇日、在日米軍再編に関する閣議決定が行われた。具体的な内容はほとんどなく、日米の「最終報告」を追認するものにすぎない。自治体を含む地元の同意も得られていないため実行可能性にも乏しいと、県内マスコミの報道は冷ややかだった。県知事も名護市長も、閣議決定に基づいて政府が設置する協議会には参加しないと語った。彼らをそうさせているのは、政府との合意に強く反発する県民・市民の圧倒的な世論だ。政府は「合意」したはずの知事や市長が思うように動いてくれないことに苛立ちを見せている。

今回の閣議決定の中で、一九九九年の辺野古沖軍民共用空港に関する閣議決定を廃止することが明言さ

れた。県知事と名護市長が受け入れたあの時の閣議決定すら、私たちは現場のたたかいと、それを支える広範な世論の力で廃止に追い込んだのだ。今回の閣議決定も、ねばり強く反対運動を続け、世論を高めることによって必ず廃止させることができると、私は確信している。

六月二三日、沖縄は戦後六一年目の「慰霊の日」を迎えた。梅雨明け後の厳しい陽射しに焼かれながら、六一年前にこの島の人々が強いられ、苦難と、再び戦争へと突き進み、そんな現状を思い、私は、「二度と同じ過ちを犯さないよう努力します。どうか見守ってください」と、魂魄の塔に祈りを捧げた。

沖縄戦の激戦地だった糸満市米須に建てられている魂魄の塔は、激し

い戦闘が終わった後、うち捨てられていた夥しい身元不明者の遺骨を、地域住民が収拾して建立した慰霊塔だ。沖縄戦の象徴的存在とも言える。毎年、この塔の隣で開かれる「六二三国際反戦沖縄集会」は、今年で二三回目を迎えた。沖縄戦の体験者の証言、戦争体験を受け継ぐとする若者たちの表現活動、反基地運動の報告などが行われたが、なかでも心に残ったのは、米軍再編に伴って在沖海兵隊八千人が移転する予定のグアムから参加した、先住民チャモロの、若い反基地活動家の発言だった。「日米政府はグアムの住民が移転を歓迎していると宣伝しているが、まったく違う」と彼は強調した。

そう。あたりまえのことだが、沖縄にもグアムにも、世界のどこにも軍事基地は、いないのだ。

中越大震災のその後

星野 邦子

広神村が魚沼市との合併で消える……。

その最後の広神村議会が終わり、最後の委員会懇親会の席上で、突然それは、やってきました。

初めて経験する大きな揺れに、なす術もなく、テーブルの下にもぐろうかどうしようかとほんやりしている私に、「何してるんだーッ！ 早く外へ出ようーッ！」という同僚議員の声。

はっと我に返り、慌てて飛び出す私たちに二度目の大きな揺れが襲いかかりました。

障子戸がはずれ、料理屋の厨房から聞こえる悲鳴が、非常事態を深く感じさせてくれました。

今思い出しても記憶が鮮明に蘇ります。

その後も何度も何度も大きく揺れる大地にみんなでその都度震え上がったのです。怖くて家の中に入らず、毎日夜になると車に避難する家族、二階や三階に上がらず、壊れたままになっていた部屋、亀裂の入った道路や壁、そこらじゅうに張られたテント、これらはテレビの中のドラマのようでした。

実際、地鳴りとともに襲ってくる地震に家の中で揺れがくると、これ以上大きくなると壊れるかもしれないと思う気持ちで、なんともいえない恐怖が沸き起こるのを防ぐことはで

きませんでした。

まもなくあれから二年目を迎えます。

やっと二年！もう二年！いろいろな想いが錯綜しています。

その後、「あごら」299号、302号、304号に掲載していただき、ありがとうございました。

二年目の被害状況を報告します。

広神村の場合

平成一六年十二月 仮設住宅入居
七七世帯(三三〇世帯中)二二九人
平成一八年八月 (魚沼市に合併)
仮設住宅入居 一四世帯三二人

被災者住宅の再建

仮設住宅に入れない世帯も含め、半壊以上の被災者四六七世帯に調査を行なった結果、三三世帯は、まだはつきりとは再建のめどが立っていないことがわかり、相談に乗る必要を感じているという結果になりました。

農地復旧状況

一六年 災害一五七件中二三四件完了(85・4%)

一七年六月梅雨災害八月豪雨災害一四七件中、六〇件完了(40・8%)

農道、水路等、施設の復旧状況

一六年 災害一九八件中、一六七件完了(84・3%)

一七年 災害一二六件中、六一件完了(48・4%)

広神村では農地の被害が多く、今もなお、濃く影を落としています。

農地は復旧が遅く、復旧されないうちに、そのあとの一七年六月梅雨災害、一七年八月豪雨災害で更に壊れ、踏んだりけつたりのような、あり様でした。

二年耕作されない耕地は、来年も出来ない事がわかっています。

三年荒れたままでは、耕地はどうなるのでしょうか。年老いた農業従事者の手には負えなくなってしまうので怖いものがあります。

全員避難の芋川集落の場合、一三軒(四一人)でやっと集落を維持していたのに、この震災で七軒(一九人)に減り、集落の施設の維持や管理が不可能という事態が発生しています。

七軒のうち、新築一軒、あとの六軒は修理、改築という状況ですが、村から若い人たちが減り、六〇歳ぐらいの男性が三人や四人では、年配の人を支えながらの集落の維持は難しいと思われるす。

集落センターの雪掘り、地域の行事、農業用水路の掃除や山道普請など……集落の行事は山積しています。

このことを踏まえて、県の復興基金事務局では今年になってから新しいメニューを盛り込み、地域のコミュニティ再建に力を入れているようです。

20%以上の戸数減少集落に対し

◎コミュニティ再建事業(ソフト)、自治会などの活動に際し補助金を出す。
◎コミュニティ施設建て替え、改善などに3/4の補助金を出す。(限

度額二千万円まで)

◎町内会の私有道路、消雪パイプの復旧などの経費を負担。

◎住宅移転を余儀なくされた人が行う水道敷設工事の費用補助など。

震度七だった川口町の場合

震災直後の仮設住宅入居

三四七／一五五〇世帯一、二三三人

平成一八年八月三一日現在の入居

一九三世帯 六一五人

小千谷市の場合

仮設住宅は一七箇所八七〇戸作つたが、すぐには満杯にはならず、平成

一七年五月に満杯になったようです。

八七〇戸、六八四／一、二〇〇世帯

(二三八二人)

平成一八年八月三一日現在の入居

者四二四世帯(一、四二四人)。今年

の二月一六日で満二年の災害救助法の期限を迎えるため、建築業者の都合などで間に合わない一六〇世帯には、期限を延ばせるよう、県と交渉したそうです。

集団移転という重い現実

小千谷市では集団移転は六箇所あり、そのうちの東山地区(十二平)は全住民が移転したそうです。

「集会場の維持経費や道普請など、共同作業に補助金を出している」との総務課の話でした。

また山間地の各地区に、支援職員を常駐で配置し、物産の販売やイベントの主催などを手伝い、地区の住民のやる気を掘り起こすことに力を注ぐと話していました。

これは県の復興基金事業で一〇〇%補助されるもので、五〇戸以下な

ら限度額一五〇万円、五〇戸以上なら二〇〇万円までが上限。

長岡市の場合

〔仮設住宅入居〕平成一六年当初

九六九世帯 三、〇一七人

豪雨・豪雪後の平成一七年一月一日

一、五九五世帯 五、〇九九人

平成一八年八月三一日

一、二一八世帯 三、五五八人(期限

までは空いたところに半壊の人も入

居)被災者の新築予定の人の中には、

「年一〇〇万円の所得で新築を」と

望む人もいるが、融資も受けられな

くて現実とぶつかっている人もいる

ので、その人たちには、被災者公営

住宅をお奨めしているそうです。

合併して長岡市になった

山古志の場合

避難勧告指示の出ていた山古志も一部解除され、家に戻ったという報道も、つい先日ありましたが、道のりはまだ遠く、「全員が帰られるのは、来年の雪降り前を目指している」という職員の話でした。

来年の一〇月、山古志に集落再生事業を適用して、何とか再生への道を探るようです。

集落再生事業としては、地区集落ごとに、今までと同じ土地でなくとも、まとまって建設する計画もあるようです。

山古志は我が広神の隣でいながら、その道は、いまだ閉ざされています。関係者以外はまだ入れませんし、壊れた道路の工事もまだしてないので、沿線の田んぼの工事も手が付けられていません。

私も議員の身分ながら視察にもい

けませんでした。友達の実家があるので、その許可証で今年の五月に連れて行ってもらいましたが、道路工事ですらまだ半ばしか終わっておらず、直った学校だけが、ぼつんと奇妙な感じで建っていました。

住民もそのときはまだ帰れませんでしたので、大型ダンプがばんばん飛ばして工事していて、道路も狭くとっても危険な場所でした。

「こんなんで帰れるのかなあ」というのが実感でした。

もちろん家は壊れたままです。倒壊した家屋は、さすがにもうありませんでしたが……。

山古志の皆さんは、今もまだまとまって仮設住宅におられます。

狭くて、夏は暑く、冬は結露の激しい寒い家です。

どんなにか不自由をしておられる

と思うのですが、広神でお会いする皆さんの顔は、そんなことは感じさせないほど明るいです、ほっとします。

被災された方々が、以前と同じではなくても、早くもとの穏やかな暮らしに戻れることを念じています。

ありがとう

震災から一年一〇か月が過ぎ、私たちの町や村は確実に復興への道を歩んでいます。

全国のたくさんの方から手をさしのべて助けてくださったことが復興への道標となっております。口に表せないほど、感謝の気持ちでいっぱいです。

この「あごら」の誌面をお借りしてお礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

(新潟県 魚沼市市議)

語りかけたいあなたへ 68

大里知子

男性の手

何となくテレビの料理番組を、見ていた。私は自分で料理を作るわけではないので、作り方や材料を真剣に見る気になれず、この時もかなり斜めから、その料理番組を眺めていたような気がする。

私はふだんお鍋の中を覗いて見るということをしてないので、お鍋やフライパンの中、器に盛り付けたものなどがよく見え、テレビの料理番組の良いところは、こういうところかもしれないなと思っている。

その日の料理担当は男性だった。料理番組なので手元が数回アップで映しだされて、料理を作る男性の手も、よく見えた。

「料理を作る人は、手までやさしいんだ」と思ったほど、きわめて小さめの、女性的な手だった。女性的な手と言えば、私の亡父も、ふっくらとした優しい手の持ち主だった。

もう四十数年も前、宴会から帰った父が「酒に酔ってきたら、十八の娘の手だと言って俺の手を握って放さないんだよ。気持ちが悪いつたらありやしない」と、お互いお酒が入った上でのことなのに、父は、いかにも気持ち悪そうな言い方をして、家族一同大笑いしたことがあった。

ここでちょっと、私の好みを言わせてもらえるなら、やはり男性の手はゴツゴツとして骨ばっていたほうが荒々しい力強さを感じられて、だんぜん魅力があると思っている。

もし、こういう手の持ち主に握手でも求められでもしたら、ただそれだけで幸せでメロメロになってしまいそうな気がする。

男性の手にこんな想いを抱いている私も、過去から現在まで自分の会った男性の手を想い描いて見ても、記憶に残っている手は誰ひとりとしていない。

それはたぶん人間の心など、そんなに簡単に分かるはずもないし、見えるものでもないのに、その見えないものや分からないものを、一生懸命見ようとしたり、分かるうとしたりする私の嫌な性格ゆえ、簡単に見える男性の手というものを、見のがしてしまっているためだと思うっている。

(エッセイスト 秋田県鹿角市在住)

(Eメールアドレス fusen@abeam.ocn.ne.jp)



「フェミニズム」という 命の思想

しま・ようこ 著

文芸社刊

A5判224頁1400円＋税

フェミニズムへのバックラッ

シュが進んでいる今、五〇年代後半から「詩運動」にかかわってきた、詩人のしま・ようこによって、『フェミニズム』という命の思想』が出版された。彼女はフェミニズムは「反権威をはらわたに据えた男女共生社会」のほずであるという。しま・ようこの主張は、権威主義には厳しく批判的だが生きていく人間の根から見つめる優しさに満

ちている。

かつて長欠・未就学児の仕事などに携わり、常に女や弱者の生きる場から言葉をつむいできた彼女は、自分の身体から発する〈ことば〉で、詩作品はもちろん、『自立の心理学』『フェミニストサイコロジ』なども、送り出した。男性中心の心理学批判は、女性学に軸を移して実を結ぶ。

扶養するもの／されるものと

いうジェンダー補完関係を基盤に成り立っている家族単位の戸籍制度について、たとえば「家族単位の健康保険を個人単位に」と言う。

〈男女平等〉は、もう古いと、実際の参画度の低さを問題にしないまま解することは、一歩誤ると不平等化隠しの手立てになりうる、と統計や彼女自身の活動の現実から指摘する。これは、「フェミニズムという命の思想」を消さない意思を伝える試みである」と。

二〇〇二年の著書『敗北の豊かさからの出発』（津軽書房）では、次のように述べている。「北」という方位は、北半球中心の発想に過ぎず、人は心の辺境

に触れながら育っていく。彼女自身は当時の津軽の貧しい暮らしの中で民主主義教育を受け、肌を切る寒気に耐える訓練から「じょっぱり」（強情張り）を身体にし込ませた、と。

日本は今、アメリカの世界戦略の中に組み込まれ、ベアテ・シロタ・ゴードン発案の憲法二四条も見直し論が出ている。そんなとき女たちが直面するさまざまな問題を生活者として生き、見つめ、活動してきた立場から、本書には多方面の具体的切り口が読み取れる。「男女共生」という政策のごまかしも、七〇年代初頭のウーマンリブによる性別役割批判の原点に立ち戻って考えており、ジェンダー

フリーという言葉は、フェミニズムの深みから浮かんだのではなく、単なる政策用語だったと言う。

支払い労働や「公」が上位という捉え方、分業論を、男性は労働問題、女性は何理問題にからめて位置づけるアンバランスに、男女共同参画を困難にしている根がありはしないかと問いかける。

九九年に「男女共同参画社会基本法」が成立したが、「男女の役割分業崩しを制度に組み込む困難さ——その現状」を分析している。そして男性が「人間になる」きっかけは、自分を強者ではなく、社会的弱者でもあると気づき、〈男らしさの否定〉

を声に出すことから始まったと述べ、賃金格差、男性の家事育児参加の問題などを解きほぐしていく。

しま・ようこの暮らしの根からの発言は、主婦論争、夫婦別姓、制度としての結婚、「大男」の正義が食いつぶしたイラク、など、どんな分析も根源的で、「フェミニズム」をすんと胸に落とす必読書として、おすすめしたい。

二一世紀の命のあり方に降りて考え直す、〈静かで激しい〉一冊として。弱く傷つきやすい状態にあるものに、優しくあたりたい。

（渡辺みえこ）



千の波 万の波 元第五福竜丸漁労長

見崎吉男のことは

見崎 吉男 著

A5判変形100頁1200円(税込み)

「刊行されるべき本が、ついに刊行された。」本書を読み終えた時、私の心を満たしたのは、そうした感慨であった。

今から五二年前、世界史にエポックを画した事件が起きた。

一九五四年三月一日、太平洋のビキニ環礁で、米国による水爆実験が行われ、指定危険水域の外にいた静岡県焼津港所属のマグロ漁船「第五福竜丸」の乗組員二十三人と、周辺の島々の住民が、実験によって生じた「死の灰」を浴び被

曝した事件である。乗組員の一人、無線長の久保山愛吉さんが事件直後に急性放射能症で死亡し、水爆による世界初の犠牲者となったことから、事件は内外に衝撃を与えた。そして、地球的規模の原水爆禁止運動が高揚するきっかけとなった。

*

著者の見崎吉男さん(八〇)は、その第五福竜丸の漁労長であった。

漁労長とは、遠洋漁業の総責任

者。乗組員を統括し、航海と漁獲に責任を負う立場にあり、遠洋漁船では船長を上回るトップの地位にあるとされ、「船頭」とも呼ばれる。

第五福竜丸被災に関する著作は、これまでに何冊も刊行されている。大半は報道関係者、学者・研究者、平和運動関係者らの筆によるものだ。乗組員の手記もある。が、同船のトップだった漁労長によつて書かれたものはなかった。

その漁労長の見崎さんが、事件と事件後について語ったのが本書である。書き下ろしではない。見崎さんがこれまでに発表してきた意見、証言、メッセージや、講演会の記録、手記などをまとめたものだ。それも、長年、見崎さんと

親しく付き合ってきた知人数人の手で、自費出版という形でまとめられた。

その一人の木村力さん（編集ボランティア）によると、地元焼津で平凡に生きるために政治的中立を貫きながらも熱く平和を希求する姿と、孤高の精神、誠実な人柄に感銘し、こうした見崎さんの姿を、事件史とは違った形で後世に残したいと、本づくりに取りかかったという。

*

読後感をひと言でいえば、事件後半世紀にして事件の真実と被災者の率直な「本音」が明らかにされたという感じだ。

未明の船上で目撃した水爆の爆発の瞬間の描写は、改めて水爆の

威力を感じさせて衝撃的である。

また、印象に残るのは、当時の新聞報道に対して、「漁師とは、こんなものだ」との先入観で、事実とは異なった報道をしたため、不作法な漁師のイメージが定着してしまつた、と批判している点だ。古典とされるラルフ・ラップの著作、『福竜丸』への不満も述べられている。

さらに、焼津市民の心情を無視して、対立、抗争、分裂を繰り返した原水爆禁止運動にも厳しい目を向けている。

憲法についての発言もある。そこには「軍備の増強はこの国でも常に国民の生活の禍根です。日本の自衛隊の凍結・縮小は、ごく当たり前のこと。もっと当り前のこ

とは解体です。日本国憲法には軍事力をもつてよいとは書いてない。軍隊をもつてはいけないことになっていきます。だから自衛隊をなくするのは当り前です。……解体すれば、随分と世の中のためになる。駄目なら半分でも1/3でもよい。その費用を環境と福祉に回す。世界がびっくりするくらい変わる憲法を世界に輸出する。こういう形こそ日本の果たす役割です」とある。

ビキニ被災事件の重い影を背負って生きてきた人の、平和への熱い思いが切々と伝わってくるような記述だ。

（岩垂 弘）

問い合わせ先は、新妻博子さん
（電話 〇五四―二四七―三六六〇）

フェミニストがつくった フェミニズムの映画

チーズとうじ虫

監督 加藤 治代

98分

どういう人の家だろう。
二階建ての民家が、画面い
っぱいに。
続いて、本の小見出しのよ
うな小さなタイトルが、小
でささやくように、無地の画
面に映し出される。
チーズとうじ虫
それがメインタイトルだっ
た。

採りたての茄子を塩で揉ん
でサッとゆがく台所の日常。
その女性の顔が、正面を向
いてズームアップ。
歯をみがく。白い泡を立て
て懸命にみがく。
こんなところを撮られて…
と、観る側は、気をもむが、
撮られた中年の女性は、にっ
こりほえむ。





家の裏手は畑。

にんじん、キュウリ、トマト、ひとつひとつ大切に大切に育てる野菜の上に、静かな風が吹く。

コスモスが揺れる。

限りなく青い空。

小さく虫が鳴く。

その畑からの、とれたての野菜のてんぶら。

おばあ様のお誕生日だ。

花束をささげる孫たち。

人と人との心の通いあう、

あたたかな家庭。

*

画面は一転して、冒頭の女性、座敷簀の柄に、ふしぎなゲージのついた紙を貼っている。

ペン ペン ペン

その紙の印に手をあてて、メロディーを口ずさむ。口三

味線というのか、絵三味線というのか。それが三味線の練習。そして本ものの三味線が届いた日、女性、あざやかに一曲を弾く。ホーキ三味線が見事に役立った！

*

健康そのものに見えた、その中年の女性は、どこか病んでいたらしい。

検査の結果を聞いた当人は、小さくつぶやく。

「やっぱりね……」

「がん」と、自らはたぶん早くから自覚していたその女性、しばらくして、かつらをかぶる。髪は、薬で抜け落ちていた。点滴が続く。

それでも、家の中は、いつも明るい。

畑には野菜が育ち、肥だめには、いつかうじが湧き、有機肥料がつくられていく。

*

みんなが大切にしていたこの母親の顔に白い布がかぶせられるまでの一日一日を、愛情をこめて撮り続けた貴重な一篇。

作者は、母親が、がんと知った日から、その映像を撮るために、京橋の映画美学校に通って学んだという。

三五ミリで撮ったのではない、家庭用ビデオでの映画は、チーズが発酵し、ひとたびはうじが湧いて、はじめて、本もののおいしさになるように、静かに熟成されていく。

いちばん大切なひとの最後までを、静かに撮りながら、どの一カットにも激しさがな

い。観る人もそれに合わせて重い病の経過をおだやかに明るく受けとめてゆく。

二〇〇五年、山形映画祭小川伸介賞&国際批評家連盟賞をダブル受賞。世界各国で絶賛を博し、三大陸映画祭ドキユメンタリー部門最高賞を受賞したこの映画のつくり手、加藤治代さんは、四〇歳になったばかり。アツと思わず声がでたほど美しい方だった。そして、なんと『あごら』の読者だった。

「フェミニストがつくった、フェミニズムの映画ですね」と伝えると、顔いっぱいに笑みが浮かんだ。

「そう言っていただけで、いちばんうれしい」

美しいお顔が一段と輝いた。

(千)





【上映会】

横川シネマ（広島）一日二回

九月二三日～一〇月六日

第七芸術劇場（大阪）一日一回

一〇月二日～未定

シネマ5（大分）

一〇月三〇日（一日のみ）

*

（あこら）で、加藤さんをお招きして、ぜひ上映会を開きたいと思っています。

◆ご希望の方は、ご希望の曜日と時間帯を、（あこら）にお知らせ下さい。

TEL 〇三ー三三五四ー三九四一

FAX 三三五四ー九〇一四

ミニコミ紹介

「あごら札幌」

長い間休載していた「ミニコミ紹介」を復活することにしました。

紹介するなら第一に、と思い続けていた「あごら札幌」をまずご紹介します。

なんといってもエライー 八月号で266号。「あごら」と、ほとんど変わらない長い歴史です。

一九九五年頃までは、「あごら」も全国各地の拠点活動が、ずいぶん盛んで、「あごら京都」「あごら大阪」「あごら鳥取」なども独自のミニコミを出していましたが、今は休刊。えんえんと続いている北海道はスゴイー 脱帽です。

*

一九七二年二月、「あごら」が刊行されるとすぐ立ち上げた「あごら札幌」

は、新聞の投書欄に、「これは」と思う意見が出てみると、投書者に「あごら」を送るなど、発起人の山口里子さんたちの活動で、どんどん仲間が増え、「あごら」の各拠点の中でも、目立って活動が盛んな拠点でしたが、その分、活動をめぐる論争も活発で、活動論をめぐって「あごら札幌」を去った方も

あり、その後各地に移住した方、職場が忙しくなった方などで、少し寂しくなっています。その中で、ミニコミ「あごら札幌」が延々と続いているのは、

中心の細田さんが、それまでどおり、みんなをふんわり包みこんでいらつしやるのかな、と、毎号、感心しています。誌面には、各地で「あごらミニ」を出し続けていた頃の「肩ひじ張らずホンネで話す」雰囲気が続いていて、届くたびに、ホッとします。

*

この266号の中身は、トップが、柴田翔太さんの「おんな組／Generation 5」。中山千夏さん、辛淑玉さんたちの辛口人気ホームページ「おんな組」の執筆者の一人としての淡々とした感想が、そのまま胸に落ちます。

次は、谷百合子さんの「女はみんな生きている」。

手書きのタイトルとカットに惹かれて読んだ「帰りのフェリーの中で書いている」という内容は、苦小牧ー仙台一四時間の船、仙台ー郡山三時間のバス、それから三〇分かけて三春へ。山の中の喫茶店「きらら」で、「あく抜きに一週間かかるので、要予約」というドンクリカレーのおいしさに、ドンクリが主食だった縄文時代を思い、「食べながら考える」という相客と話し込み、「骨の髄まで休息した」一日目に始まる

三日間のモーレツ旅行記でした。

二日目の宿は、南会津のペンション

「自然食の宿・タンポ・ロッジ」。三日

目は、山越え谷越え川越えて、新潟

は魚沼郡津南へ。茅葺きの一軒を借り

農の合間に市民運動、選挙にも出たり

する「六ヶ所村、女たちのテント」の

リーダー格と積もる話。アジアの女た

ちやホームレスの人たちを長年支援し

ている名古屋の鍼灸師さんともここ

で合流。そこへ東京から一五年間、六ヶ

所で核燃の写真を撮り続けていたKさ

んも現われ……六ヶ所や無防備宣言の

話に花が咲き、とにかく元気になって

帰ってくる話。読み手も、とにかく元

気になってしまふ。

さらにスゴイのは、三番目の記事、

KSさんの「自転車旅行」。

五月三日朝四時、札幌を發つて、定

山溪・中山峠・喜茂別・道の駅とよう

らを経て、一七時、長万部着。翌四日

は六時半発、道の駅YOU↓遊↓もり

を経て一六時函館着。

五日は朝市の後、八時

四五分発、道の駅YOU

↓遊と前日と同じコース

を通過して長万部泊。翌朝

五時一五分に出て、道の

駅とようら↓中山峠を越

えて夕方札幌へ。

「中山峠を越える時に

はすっかり馬力が落ち、自転車を押し

て歩き、少しでも坂がゆるやかになる

と、すかさず自転車を漕ぎ、辛くなる

と押して歩いた」という文章に、読み

手も息を吐いたり吸ったり、ああツカ

レル！

でも、ワープロやら手書きやらの八

ページを読み終わると、どの書き手の

ことも大好きになっている。

なるほどなア、これじゃ本家「あこ

ら」よりずっと好きになるのもムリは

ない。——考えてみると細田サンも谷

サンも、たしか五十に手の届く頃(?)。

若い！元気！「あこら」も見習わなく

っちゃ……。そうすれば「あこら」も

売れる本になるゾ。(東京のばーば)

連絡先は、☎&F〇二一六四四二九二七

細田さん。購読料は年間一〇〇〇円。郵便

振替〇二七〇一三二五七〇あこら札幌へ。



人間を大切にせず 国ほろび

仕事をしているお父さん、
家でのお父さん、
どっちも大好き。

佐藤弘道 親子

10月は 仕事と家庭を考える月間 です。

ひろがる、仕事と子育てを両立できる職場環境づくり。

少子化時代の企業の在り方を考えるシンポジウム

合計特殊出生率1.25。深刻な少子化の背景には、仕事と育児を両立することへの負担感があります。男性も女性も仕事と生活のバランスのとれた働き方ができる職場環境づくりのために、今、何をしなければならぬのか。ご一緒に考えてみませんか。

●平成18年10月23日(月)13:00~16:00(12:30開場) ●ヤクルトホール ●託児所・手話通訳あり ●入場無料
●主催:財団法人21世紀職業財団 ●後援:厚生労働省、NHK、朝日新聞社、産経新聞社、日本経済新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

住友金属裁判勝利の和解

女性であることを理由に昇給昇進で差別されたとして、住友金属工業の女性社員四人（うち一人はすでに定年退職）が、同社に差額賃金や慰謝料など総額三億四〇〇〇万円の損害賠償を求めた訴訟の控訴審が四月二五日、大阪高裁（井垣敏生裁判長）で和解した。

「賃金、処遇等に於ける男女間の格差が適正に是正されたとはいない難い現実があり、そのような意識改革の遅れが、新たな差別（間接差別や女性を中心とした非正社員化等）を生み出した」「被告のような大企業で改革へ向けた取り組みが進展することは、意識改革を進める上で、有益であり、社会的にも大きな意義がある」として、同社が昨年三月に大阪地裁が認定した賠償額（六三〇〇万円）を上回る総額七六〇〇万円の解決金を支払うことと、在職中の原告を含む女性労働者の処遇について十分な配慮をするこ

とで、和解が成立した。

女性差別裁判では、東京では女性側が続々勝訴する一方、大阪では敗訴が続き、この「東高西低」を打破しようと、全国の女性が住友裁判を支援。大阪の女性たちは裁判所を囲む「人間の輪」デモなど、大キャンペーンを次つぎに展開。ついに、住友電工・住友化学・住友金属三社とも、高裁で、歴史的な「原告側勝利和解」をかちとった。

三人に一人がDV被害

男女共同参画局は、九九年、〇二年、に続く「男女間における暴力に関する調査」の結果を発表した。今回の調査は、〇五年一月から一二月にかけて、全国の成人男女四五〇〇人を対象に実施。回収率六四・二％。

被害の内容は、

「身体的暴力を受けたことがある」	二六・七％
「精神的な嫌がらせや脅迫」	一六・七％
「性的な行為の強要」	一五・二％

受けた回数、

「いずれか一つ」

三三・二%

「何度も受けた」

一〇・六%

配偶者から被害を受けた女性で、

「相手と別れたのは」

四・七%

「別れたと思ったが、別れなかった」

四三・二%

理由は、「経済的な不安があった」

二七・七%

結婚前に、交際相手からなんらかの被害を受けたことが

ある女性は、一〇代で二三・五%、二〇代で二二・八%。

その後、相手との関係は、

「相手と別れた」

五〇・八%

「別れたと思ったが、別れなかった」

三一・四%

被害についての相談先は、

「友人・知人に相談した」

五三・四%

「どこにも相談しなかった」

三九・〇%

男女間の暴力防止のために必要なことは、「家庭で保護者が子どもに対し、暴力を防止するための教育を行う」が七割で、最も多く、「学校または大学で児童・生徒・学生に対し、暴力を防止するための教育を行う」、「加害者への罰則を強化する」の順になっている。

インド、出生前性別検査で医師に懲役刑

多数の持参金が必要なインドでは、男児出生を望んで女児を中絶する例が多く、出生前の性別検査は法律で禁じられている。しかしほとんど発覚する例はないが、三月末、検査をした医師とその助手が、懲役二年、罰金五〇〇〇ルピー（約六、五〇〇万円）に。警察がおとりの妊婦を使って、初めて立証に成功したものだ。

内閣府、少子化で国際意識調査

内閣府は、〇五年一〇—一二月、「少子化社会に関する国際意識調査」を、日・韓・米・仏・スウェーデンの五か国で、二〇—四九歳の男女各一〇〇〇人ずつを対象に実施、〇六年五月、結果を公表した。

「出産を希望するか」「子どもをもっと増やしたいか」を尋ねた質問では、「これ以上増やさない」が日本五三・一%、韓国五二・五%だったのに対し、他の三か国では「希望数になるまで増やす」が五〇—七〇%で、大きな差が見られた。

増やしたくない理由としては「お金がかかりすぎる」がトップで、日本 五六・三%、韓国 六八・二%に達し、健康その他の理由と、大きな差をつけた。

「就学前の育児を夫婦が同じように行う」は、スウェーデン 九二・四%、米 六〇・四%、仏 五三・三%に対し、日韓両国は共に三二%。目立って低かった。

「子どもを生き育てやすい国だと思う」は、スウェーデン 九七・七%、米 七八・二%に対し、日本 二四・六%、韓国 一八・六%と、すべての項目で日韓が目立った。

国の審議会等の女性委員の比率、さらにアップを

政府は二〇〇〇年に、国の審議会等の女性委員の比率を「二〇〇五年までに三〇%」としていたが、〇五年九月、三〇・九%に達したため、新たな目標として、「二〇一〇年までに三三・三%、二〇二〇年までに四〇%達成」を掲げた。

また臨時委員、特別委員、専門委員も、「二〇三〇年までのできるだけ早い時期に、女性三〇%を実現、当面目標は一〇年までに二〇%」を打ち出した。

全国で産婦人科医が不足、 産婦人科の女性医師の比率は増加

予定されていても、なかなか予定どおりに生まれないのがお産。しかも予期しない事故も多い。一方、不妊症対策は、百万二百万積んでも……という患者がひしめくなか、全国各地で産科医が急減している。

日本産科婦人科学会（理事長武谷雄二氏）はこの問題を重視、同学会の「学会のあり方検討委員会」（吉川裕三委員長）が、全国一一〇の大病院を対象に、二〇〇三年四月と〇五年七月の変化について、「大学および関連病院に関する実態調査」を実施、〇六年四月二四日、結果を公表した。

産婦人科の常勤医数は〇三年五一一人に対し、〇五年は、四七三九人と九二%に減少。分娩取り扱い病院は、一〇〇九から九一四と九〇・六%に減少。

一方、産婦人科常勤医の男女比は、女性が二六・五%に増加、特に関東では三〇・八%となった。

こうした結果を受けて、同学会では、六月に女性医師が働き続けやすくする支援委員会を設置、委員長に就任した都立府中病院産婦人科部長の桑江千鶴子さんは「産婦人科

を目指す医師の三分の二は女性。五年後に彼女たちがどのくらい現場にいてくれるかで、産婦人科医療の今後が決まってくる」と語った。

女性医師の仕事と育児、両立支援へ

医師国家試験の合格者に占める女性医師の割合は、一九九一年の一九・二％から、二〇〇四年には三三・八％に上昇したが、現在働いているのは、医師全体の一六・四％にすぎない。

当直や緊急の呼び出しのある医療現場の労働条件は過酷なうえ、家庭と仕事の両立が困難で、出産や育児を機に離職することが多く、医師不足の一因とされている。

大阪医療センターは、昨年フレックスタイム制やパートタイム勤務などを導入、二四時間保育も検討を始めた。

東京女子医科大学は「保育とワークシェアによる女性医学研究者支援室」を設置。

厚生労働省は、今年度中に、東京と大阪で〈女性医師バンク〉を作り、パート勤務その他、働きやすい条件での職場復帰を支援する。

千葉県議会、

男女共同参画センター設置条例案を否決

女性知事を持つ千葉県なのに、県議会は、三月二四日、「県女性センター」を、「男女共同参画センター」に改め、柏市の県女性センターを分館とし、館山市にも分館を新設するという「男女共同参画センター設置管理条例案」を否決した。

この結果、柏市に現存する県女性センターまでが事業中止となった。

東京に初の女性消防署長

東京都は、東京消防庁女性消防官の第一期生、谷口由美子さん（予防部査察課長、五六歳）を、高輪消防署長に任命、三月三十一日、就任した。

全国でも初めての女性消防署長の谷口さんは、「女性ならではの気遣いと粘り強さで、防火・防災に取り組みます」と、心強い就任声明を発表、若い女性消防官たちにインパクトを与えた。

衆院千葉七区補選で民主党女性が初勝利

自・民両党が党首以下幹部総動員で争った四月二三日の衆議院千葉七区の補選は、予想に反し、民主党の新人で二十六歳の女性元県議、大田和美さんが九五五票の僅差で勝利。最年少国会議員が誕生した。これで女性の衆院議員は四人(九・四%)に。

教科書から消えた「ジェンダーフリー」

文科省は、○五年度教科書検定の結果、「現代社会」で二社が採用しようとしていた「ジェンダーフリー」を使用禁止に。すべての教科書から「ジェンダーフリー」が消えた。

代々木ゼミ女性職員・産休訴訟で勝利

東京の大手予備校、代々木ゼミナールの女性職員(四二二)が、産休と育児時間を全部欠勤扱いとして二六万円をカットされた訴訟で、地裁・高裁とも「全額不支給を違法」としたが、学校が上告。最高裁は、不支給を違法としな

がらも、「産休・時短を欠勤とみなす就業規則を追加した経緯」について審理を尽くすよう東京高裁に差し戻し、四月一九日、控訴審判決。「勤務時間短縮に応じた減額」は認められ、約九七万円の支払いを、改めて学校に命じた。

ジャマイカに初の女性首相

各国に 女性首相が続々誕生するなか、ジャマイカでも、下院の第一党・人民国家党の党首、ポーシャ・シンブソン・ミラーさん(六〇)が、バタソン首相退任の後を継いで、三月三〇日、首相に就任。同国初の女性首相になった。

クウェートで女性が初の投票

クウェートは、男女同権を早くから認めていた隣国イラクと違って、イギリス領時代そのまま、女性には参政権がなかったが、○五年五月、参政権がみとめられ、○六年四月、クウェート市のサルミヤ地区で、初の女性による投票を実施。立候補者も八人中二人が女性だったが、投票率は四〇%以下、女性の当選者はゼロ。

教育基本法改正ならず

政府は四月二八日、教育基本法改正案を国会に提出。反対の多かった「愛国心」は、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度」に変更したが、国際婦人年連絡会、日本YWCA、新日本婦人の会その他、多数の団体・個人から反対要望が続々提出され、今国会では未成立に。

水俣病公式確認から五〇年

多くの死者・障害者を続出しながら、「遺伝」として差別され続けてきた水俣病。公式確認から五〇年の今も、未承認患者は数多い。一方、加害の会社、チッソは、隆盛、発展。これに憤り、五〇年式典参加を拒否した患者もいる。かつての豊饒の海、水俣の漁業は、今も沈滞の中にある。

クボタ、アスベスト被害に救済金支払いを発表

アスベスト生産の最大手機械メーカー、クボタは、四月

一七日、中皮腫発症患者一人あたりに最高四六〇〇万円の救済金支払いを発表。救済申し出が相次いでいるが、立ち上がる気力も人脈もない患者は、把握できないほど多数。

広島・長崎・原爆症不認定取り消し訴訟

五月二日、大阪地裁は、一例ながら不認定を取り消したが、訴える気力も資金もない多くの患者がひしめいており、戦後六一年、その対策が改めて問われている。

不承認の多くは「被爆当時の状況証言があいまい」が理由。「当時十歳以下だった子どもにまで、精密な証言を求める現行法にも問題がある」との声も、日々高まっている。

海上保安庁に初の女性次長

女性の海上保安官は全国に約二五〇人。四月一日、初の女性次長が誕生した。

石垣海上保安部次長となった雪松菊江さん（五八）は、那覇市出身。琉球大学卒業後、一九七一年琉球政府に入庁。本土復帰で、第十一管区海上保安本部職員になった方。

幸田シャーマンさん、国連広報センター所長に

外務省は、四月三日付で環境・教育問題などで活躍しているハーバード出のニューズキャスター、幸田さんの所長就任を発表した。

出生率1・25に政府大ショック

年々低下を続けていた出生率。社人研（国立社会保険・人口問題研究所）では「二〇〇〇年の一・三六%から〇五年は一・三一%となり、二二年の一・一四%で下げ止まり、その後回復する」と、推定していたが、政府は六月一日、〇五年の結果を一・二五%と発表した。このままでは「一億人割れ」は、当初予定していた五一年より大幅に早まると推定され、小泉首相も「今後少子化対策が最重要課題になる」と記者団に語った。

一方、「〇五年は一・二五%」と正解を予測していた民間のシンクタンク、アトラクターズ・ラボは、「一億人を割るのは政府予測より九年早い四二年。出生率によって変化する世代構成も、五〇年時点での六五歳以上は四二%」

と、政府の三六%を上回る数字を発表。結果として、働き手となる一五〜六四歳は四千万人近く減少と推定、政府の三千万人減少説を約一千万人上回る予測を示している。

今回の正解度から推定すると、民間予測のほうが、より信頼できそうだが、問題は「少子化」をどうとらえるか。

地球温暖化は、過剰人口と密接な関係がある。「一国至上主義」ではない「地球至上主義」に立てば、少子化は、むしろ理想像とも言える。「少子化＝生めよ増やせよ」キャンペーンに利用されないよう、女性たちで、自分自身の体を大切に考えていきたい。

「あごろ」では、「少子化を考える」号を、今年度内に発行の予定。ご意見、ご投稿を待っている。

住民税が八倍に！ 高齢者大ショック

六月はじめ、日本全国の自治体の役所の市民課税課は、高齢者であふれた。「住民税が一挙、八倍になった」と抗議するお年寄りに、担当者は、「老年人者控除（四八万円）の廃止、公的年金控除の縮減（例えば六五歳以上で年金三三〇万円以下の場合の控除額が一四〇万円から一二〇万円

に減少)のため、課税される所得の額が上がり、さらに定率減税の半減(一五%←七・五%)で、税額から控除される額も減少したために、収入が変わらなくても住民税が大きく上がることになった」と、理由の説明に汗をかいた。

小泉政権五年、「構造改革」は、福祉をもたらすものではなく、強者をより強く、弱者をますます弱くした現実を如実に示した一例。

「幼保一元化」初めて合法化へ

保育園に子どもを預けている母親を中心に、一九五〇年代後半から展開されていた、幼稚園と保育園の一元化運動は、政府の方針で、進まなかったが、「出生率低下時代」を受けて、幼保双方の機能を持った新施設「認定こども園」を整備する法律Ⅱ「就学前の子どもに関する教育・保育の総合的な提供推進法」が上程され、六月九日、参院本会議で、自・公・民各党の賛成で可決、成立。五〇年前からの夢が、ようやく実現した。

「認定こども園」は、零歳から就学前の子どもの教育と保育を一体としてとらえた総合施設で、入園に際し親の就

労の有無を問わず、専業主婦の相談・交流にも応じ、地域の子育て支援拠点ともなるが、具体的な認定基準は、都道府県が条例で実施する。

改正均等法成立

男女双方への差別の禁止、妊娠・出産を理由とする不利益取り扱い禁止を拡大、セクハラに関する事業主の配慮義務を措置義務に強化する一方、妊婦をのぞく女性の坑内労働の禁止を解除した「改正均等法」が、六月一日、衆院本会議で全会一致で可決成立した。〇七年四月から施行される。

最大の焦点、間接差別は、「募集・採用時に身長、体重、体力」「総合職の募集・採用時に全国転勤」「昇進時に全国転勤」を要件にすることを禁止する「限定列举方式」をとることとしたが、労働者側に配慮して、付帯決議で「間接差別は厚生労働省令で規定するもの以外にも存在しうるものであり、規定以外のものでも司法判断で違法と判断される可能性があること」、「施行五年後を待たずに機動的に対象事項の追加、見直しを図ること」を盛り込んだ。

市川房枝記念会館改修工事で大揺れ

姉齒事件以来、「ビルの安全度」が問題にされ、各地でチェックが行われ始めた。堅牢そのものに見えた代々木の市川房枝会館も一四か所の補強が必要となり、立ち入り禁止に。同会館を利用していたさまざまな学習会や、国際婦人年連絡会の諸分科会も、会場が使えなくなり、分科会ごとくに会場探しに苦労している。

事務局は近くのニュー・ステート・メナーに移転。電話・FAXは従来どおりだが、職員八人は、二人を残し六人を解職。会館を利用していたすべての人びとにショックを与えた。

連絡会傘下四四団体で、事態解決を模索中だが、各団体とも財政困難、またカンパ程度で解決できる問題でもなく頭をかかえている。

名取はにわさん退任

厳しいジェンダーバッシングの直撃に必死の抵抗を続けていた男女共同参画局局長の名取さんが六月二八日退任、

板東久美子さんが新任された。

現代女性文化研究所事務所、文京区に移転

現代女性文化研究所は、新宿区に事務所を設けていたが、八月に、ゆかりの望月百合子記念館に移転、一階の事務スペースを広げ、一・二階とも講座などに利用する。

事務所は平日正午～五時オープン。連続講座は、毎月第三土曜日、九月は二時～三時「女人芸術」、四時～五時半「歌舞伎という日本文化」。

望月百合子記念館は、〒112-0011 東京都文京区千石四―三二―六 電話〇三―三九四一―一〇〇七 FAX〇三―三九四一―七五七七

らいてうの家、ついにオープン

らいてうのご遺族から提供された土地に、NPO法人「平塚らいてうの会」が中心になって全国から集めた募金で建設を急いでいた「らいてうの家」が、長野県上田市（旧真田町）の四阿高原に完成、五月二八日、全国から三〇〇余

人の参加者で、オープンングセレモニーが開かれた。

米田佐代子会長は「らいてうの、平和・協同・自然の志を、皆さんとともに育てていきたい」と挨拶。らいてうの曾孫の奥村ともさんと一緒に、正面入り口でテープカット。木遣りと真田太鼓で落成を祝った。

なお、オープンを前に、らいてうが好んで書いた「無限生成」を折って、ブナの苗を記念植樹。(へあごら)の山口美代子・斎藤千代・小俣光子も参加した。

「ジェンダーフリーの混乱」に政府へ要望書

○五年末に閣議決定された第二次男女共同参画基本計画に、「ジェンダーフリー」を使った不適切事例が記載され、○六年一月には、内閣府男女共同参画局が、都道府県担当課などに「ジェンダーフリー擁護の不使用を促す事務通達」が出された。

上野千鶴子・東京大学大学院教授の、東京・国分寺市での講演中止、福井県生涯学習館でのフェミニズム関連書籍の一時撤去など、相次ぐ攻勢に女性たちの抗議集会も、続々展開された。

福島みずほ社民党党首、葛森樹・琉球大非常勤講師たちは、六月五日、猪口邦子男女共同参画担当相に面接、抗議の要望書を提出した。

妻の平均家事時間は一日六時間。 フルタイム就労の妻でも家事は妻に集中

社会保険・人口問題研究所が○五年七月に実施した、全国一万四三三二世帯対象の「全国家庭動向調査」によると、妻の平均家事時間は一日約六時間、フルタイムの妻でも一日四時間以上が二五・八%。

夫婦の家事分担度は、「妻が八〇%以上」が、二〇歳代をのぞく全年齢層の八割以上。夫が家事も育児もしない「妻集中型」が、妻や末子の年齢に関わりなく八割前後を占めた。

夫の帰宅時間が午後八時を過ぎる人は、○三年度の調査よりさらに遅くなり、妻が二〇歳代で二一・六%、三〇歳代で二五・〇%に。

一方、夫が育児に協力的なほど、妻の就業継続は多く、次子以降の出産数も増えていることが明白になった。

民法改正、九度目の国会提出

「夫婦別姓、婚姻可能年齢を男女とも一八歳以上に」などを盛り込んだ野党共同の議員立法案は、今年も民・共・社三党が五月三一日に衆参両院に提出。

今回も継続審議となったが、与野党の勢力が逆転しないかぎり、念願が達成される見通しはない。

滋賀県に女性知事誕生

嘉田由紀子（56）さんは、七月二日、滋賀県知事選で、東海道新幹線駅の建設など県が推進する大型公共事業を「もつたいない」と訴え、自・公・民相乗りで、盤石と思われた現職、国松善次（68）さんを三万二〇〇〇票余の大差で破り初当選した。

嘉田さんは埼玉県で生まれ育ち、中学校の修学旅行で琵琶湖に魅せられ「こんなところに住みたい」とあこがれ、一九八一年、滋賀県職員になり琵琶湖の研究に、環境の専門家として従事。

その後、京都精華大学で環境社会学の教授も務め、三〇

年近く実地研究で県内を回って実績を積み、人脈を広げてきた人。

研究者から政治家へ転身のきっかけは、国土交通省近畿地方整備局の諮問機関、淀川水系流域委員会委員を務めた経験から。「ダムに頼らない治水を提案しても、知事の拒否にあつて実現しない。それなら自分が知事になるしかない」と痛感したのが発端。

昨年暮れ、知事選へ出馬する意思を固め、四月一八日、琵琶湖畔で立候補表明。四月二七日「由紀子・勇気の応援団」が発足した。

対話を重視して「ざぶとん会議」と銘打って地域住民と車座で意見を交わし、若者はホームページの拡充に大奮闘。水、自然、廃棄物、生協など、環境運動をしている人びとや、嘉田さんの受講生たちが加わり、さまざまな勝手連的支援が広がり、選挙は初めてという人たちとも、つながりあった。

「よかったですなあ。これからはおなごの時代や」、県民党として選挙戦を闘った支持者を祝福する高齢女性など、全国の希望の星だが、これからが正念場。全国の女性と無党派で支えたい。

惜別

湯川スミさん

一九一〇年大阪市生まれ。国際的には、湯川博士夫人という以上に、平和運動家として知られた人。二〇〇七年の湯川博士の生誕一〇〇年を記念しての「湯川年」を前に、五月一四日、九六歳で亡くなられた。

一九三二年湯川秀樹さんと結婚。米プリンストン高等学術研究所客員教授に赴任した夫の秘書役を務め、四九年のノーベル賞受賞式にも同行。八一年、夫の死去後、核兵器廃絶の遺志を受け継ぎ平和運動に専心、八七年世界三八か国五六団体で構成する国際平和団体「世界連邦世界協会」の名譽会長に就任。

著書に『苦楽の園』がある。

石井あや子さん

一九〇二年千葉県生まれ。元〈新日本婦人の会〉会長。七月一三日、一〇三歳で天寿を全うされた。

日本女子大卒業後、鉄道省（今のＪＲ）に入省、四九年定員法で減員。その後、女性・平和運動に取り組み、婦人

民主クラブ委員長、原水爆禁止日本協議会顧問などを歴任した方。

鶴見和子さん

日本のあり方について、常に鋭い視線、正確な資料分析で問題提起しておられた鶴見さんが、七月三十一日、八八歳で亡くなられた。

一九一八年東京都生まれ。津田英学塾を卒業後、四一年ヴァッサー大学哲学修士号取得、四二年日米交換船で帰国。四六年『思想の科学』を鶴見俊輔、丸山真男などと創刊。六九年から八九年まで上智大学教授。

『思想の冒険』グループを作り、水俣病や近代の超克などの共同研究を行なった。この研究から南方熊楠に関心を抱き、七九年『南方熊楠』で毎日出版文化賞、九五年に南方熊楠賞、九九年に朝日賞を受賞。

九五年脳卒中で倒れ、左片まひで車椅子生活を送りながらも、日本の現状に鋭い問題提起を続け、ますます期待を集めておられただけに、ただただ残念。

『女書生』『鶴見和子曼陀羅コレクション』全九巻『鶴見和子対話まんだら』『歌集 回生』など著書多数。

●研究ジャーナル委員

浅倉むつ子 早稲田大学
藤原 昭英 京都大学
神田 道子 国立女性教育会館
木本喜美子 一橋大学
田中 雅文 日本女子大学
長野ひろ子 中央大学
松本佳子 上智大学

●研究ジャーナル協力委員

尾川 洋子 国立女性教育会館
伊藤 りり お茶の水女子大学
江原由美子 京都大学
萩野 美穂 大阪大学
国広 陽子 武蔵大学
久保田真弓 関西大学
佐々木政子 東海大学
澤野由紀子 聖心女子大学
藤原 英子 お茶の水女子大学
杉本清代 金沢大学
高橋 恵子 聖心女子大学
武川 正吾 東京大学
辻村みよ子 東北大学
内藤 和実 群馬大学
福岡 護 東京大学
前田 信彦 金沢大学
丸山 茂 神奈川大学
三輪 建二 お茶の水女子大学

Journal of
the National
Women's Education
Center of
Japan

「研究紀要」から「研究ジャーナル」へ

1997年創刊の本誌は、第10号(2006年8月刊行予定)から「国立女性教育会館研究ジャーナル」と名称を変えます。男女共同参画に関わる研究と実践をつなぐジャーナルとして編集していきたいと思っておりますので、ふるってご投稿ください。

国立女性教育会館研究ジャーナル第11号

論文公募

男女共同参画のための研究と実践の
交流推進フォーラムでのワークショップ
開催のお知らせ

日 時 2006年8月25日(金)～27日(日)のうちの1日
場 所 国立女性教育会館
内 容 研究ジャーナル第10号入選論文報告会、
論文と実践事例研究の書き方講座を行います。

自由論題での公募です！

投稿締め切り 平成18年11月6日(月)17時必着

論文 オリジナルな研究成果をまとめたもの 日本語2万字以内 英語1万ワード以内
実践事例研究 実践的な活動や事例の分析 日本語2万字以内 英語1万ワード以内
研究ノート 研究の中間報告、新しい研究方法についての報告 日本語1万2千字以内 英語5千ワード以内


★研究ジャーナル委員等3人のレフェリーによる選考の上、掲載論文は平成19年3月に決定します。

独立行政法人 国立女性教育会館
お問い合わせ先 研究国際室

〒355-0292 埼玉県比企郡嵐山町菅谷728
TEL 0493-62-6711 (内線2304, 2305, 2308)
ホームページ URL <http://www.nwec.jp>

詳細については投稿規定、執筆要項をご参照ください。(会館ホームページに掲載)

東京 平成18年度 ウィメンズプラザ フォーラム

会場  東京ウィメンズプラザ

10月13日(金) 14日(土)

東京ウィメンズプラザではこの期間中、以下の催しを行っています。たくさんの皆さまのご参加をお待ちしています。



◆JR山手線・東急東横線、京王井の頭線
渋谷駅下車徒歩12分
◆東京メトロ銀座線・半蔵門線・千代田線
表参道駅下車徒歩7分

 東京ウィメンズプラザ
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前五丁目53番67号
TEL 03-5467-1714

公開シンポジウム

10月13日(金)
「広めよう!進めよう!ワーク・ライフ・バランス
～深まる意識と広がる制度～」

定員 100名
入場無料

コーディネーター: 武石恵美子 (法政大学 キャリアデザイン学部助教授)
事例報告企業: (株) 東芝、富士ゼロックス (株)

●図書資料室では、シンポジウムに関連した資料の展示を行います(10月10日～17日)。
14:00～16:30

主催: 東京都・東京経営者協会

平成17年度 民間活動助成事業報告会

無料

事業名	報告団体	内容
カブール大学・天理大学・ クロスアーツ協働プロジェクト ドキュメンタリー映画 「Kabul Triangle」	NPO法人 クロスアーツ  代表 村山 達哉	戦乱後のアフガニスタンで、未だ強い差別と偏見を受けながらも、第一線で活躍し始めた女性たちや市井の人々の現状を描いたドキュメンタリー映画の制作。映画の上映と、制作秘話等スタッフの講演により報告します。
「DV被害女性支援者養成 マニュアル」作成事業	地域生活支援ネット 「女性ネットSaya-Saya」 共同代表 野本 律子 松本 和子	オレゴン州の民間DV支援団体「ラファエルハウス」で使用している支援者養成マニュアル全12冊を翻訳。翻訳に際して心がけたこと、苦労したことなど、現在の会の活動状況を含めて報告します。
10月14日(土) 視聴覚室 14:00～16:30 土系女子学生のための 就職支援 パンフレットの発行	土系技術者女性の会 事務局長 須田 久美子	土系系技術者を目指す女子高生や女子大学生を後押ししようと、現役の土系系女性技術者の仕事内容や就職活動の体験談、メッセージなどを示したパンフレットを発行。編集談や反響を報告します。

■ 団体・グループによる催し

■ 区市町村の施策紹介

■ 都内女性センターの活動紹介

■ 男女平等参画を進める会の取組事例紹介

◆ 東京都

12100

会と催し



日本に軍事基地は要らない

婦人参政権六〇周年集会

評価した。

(斎藤涼)

婦人有権者同盟など七婦人団体による議会活動連絡委員会は、四月一〇日、婦人参政権行使六〇周年記念集会「日本に軍事基地はいらない」を、東京代々木の婦選会館で開催。

冒頭、首藤信彦東海大教授が「米軍基地再編とは何か」の題目で講演。防衛庁と名護市が基本合意した普天間飛行場「移設再修正案」を詳しく解説。「そもそも普天間は（あつてはいけない基地）。それを漁業の中心地、辺野古に移し、滑走路二本で地元の利益も二倍になると誘導するのは、欺瞞」と批判した。

続いて、フランスの若者デモを紹介、その八〇年も前、「市民が行動して反対の意思表示を」、「女性にも一票を」と、今日では想像も出来ない状況の下で、必死の努力を続けた市川房枝さんたちの婦人参政権運動の先進性を、改めて再

土井たか子さんを「支える会」
の解散パーティー

三月三〇日、長年「護憲の象徴」として活躍してきた土井たか子さんを「支える会」の解散パーティーが主婦会館で開かれた。

発足以来会長を務めてきた吉武輝子さんは、「今までは政治家である土井さんを支えてきたが、これからは一市民の土井さんとともに歩む」と述べ、「今日は再出発の日」だと訴えた。

また土井さんは、「これまで支えてくれたスタッフに、はじめて口に出して感謝の気持ちを述べたい」と応えた。会の終わりには、土井さんの大応援団・新谷のり子さんとともに〈三月三〇日の日曜日〉〜「フランシーヌの場合」をみんなで熱唱し、和やかに幕を閉じた。（木瀬慶子）

ジェンダー平等と平和めざし

06 権利とくらし平和のための女性集会

三四年前に発足、二年に一度開かれてきた「権利とくらし平和のための女性集会」も、今年で一七回目。テーマはいま話題の「ジェンダー平等と平和」。

四月二三日、二三日の二日間、東京・田町の「女性の仕事の未来館」は、今年も満員。まず「小泉内閣は、いま女性運動の中枢をになう女性たちに何をもちたらずのか？」をテーマに、暉峻淑子さんが基調講演。

「格差社会は、豊かな人が、普通に暮らしている人からむしり取ること」と、小泉政権の「小さな政府」の促進で、家族共同体・会社共同体・地域コミュニティがどのように衰弱していったかを数字をあげて説明。社会保障制度を削減し、人権・生活保障は「小さな政府」にする一方、憲法・教育基本法改悪・共謀罪などを「大きな政府」で強行しようとする実態を明確に分析、「つつましくてもヨカッター」と一生を全うできるようにするのが政治ではないか」と、相変わらずの鋭い指摘。

続くシンポジウムでは、ジェンダー平等をメインテーマ

に、「ジェンダーバッシングの現状と対策」「均等待遇の実現」「ジェンダー予算の獲得」「ジェンダー平等の視点を持つ政治家を議会に」等々、活発な発言が続出。

「新自由主義経済で社会保障が崩れて来ている今、一人ひとりの女性が、確信をもって行動を」の機運が盛り上がったのは、心強かった。

(木村則子)

売春防止法公布五〇周年の会

敗戦の翌年、一九四六年にGHQに売春防止の覚え書きが出され、五二年、売春業者処罰の国内法が出来、宮城タマヨ、堤ツルヨ、神近市子さんなど女性議員が「売春処罰法案」を四回も提出、五六年、二度目の政府案でようやく成立した「売春防止法」。五〇周年の今を問う会が、〈売春問題ととりくむ会〉を中心に、五月二三日、衆議院議員会館で開かれ、長年この運動を続けて来た方がたはじめ、支援者たちが会議室を埋めた。

若尾典子・早立広島大学教授の講演「人権としての〈性〉女性の安全保障を考える」は、売防法が女性だけに重い罰を課すザル法ゆえに売春容認社会となっている現状を明快

に指摘、売防法の抜本的改正を鋭く訴えた。これを受けて、これまでの長い経過、現在の問題点など、多方面からの発言が続き、長い女性差別の根源が、敗戦によって、ようやく法的には根絶した経過と、今も残る根強い問題を、参加者一同、改めて感慨深く受け止めた。

しかし、遊郭に代わる新しいかたちの売買春は、ますます拡散し、日本男性による売春ツアーや幼児売春も、後を絶たない。根源にある性差別へのたたかいを、参加者一同が、改めてそれぞれの胸に誓った会となった。(斎藤千代)

暴力・人身売買・売春の現在を問う会

売買春は暴力組織と結びついて、ますます根深い深刻な問題になっている。売防法五〇周年、暴力・人身売買・売春の現在を問う会が、全国婦人相談員連絡協議会と東京都婦人保護施設の共催で、五月二十七日、虎の門の日本財団会議所で開催された。

この問題に専門的な立場から取り組んでいる人びとが集い、中見里博・福島大助教授の講演「ジェンダー以後における女性の性売買」を基調に討論。売買春を「サービス労働」とし

て合法化を求める意見に、厳しい反論を展開した。(斎藤涼)

「第二六回 女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞受賞者」贈呈式

五月二十七日(土)に、霞ヶ関ビル・東海大学交友会館で、「第二六回 女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞受賞者」贈呈式および記念講演が開催された。

猿橋賞は、女性気象学者の草分けであり、日本学術会議の初の女性会員である猿橋勝子さん(86)が一九八〇年に創設した「女性科学者に明るい未来をの会」が、毎年、顕著な研究業績をあげた自然科学系の若手(五〇歳未満)の女性研究者一名を選考し、贈っているこの賞も、今年で二六回目。森郁恵・名古屋大学大学院理学研究科教授の「感覚と学習行動の遺伝学研究」が選ばれた。

当日は、贈呈式・受賞者による記念講演に先立ち、相馬芳枝総合技術研究所顧問(第六回受賞者)と米沢富美子慶応義塾大学名誉教授(第四回受賞者)が、「初等中等教育から大学・大学院・ポストドクター・中堅シニア研究者に至る女性科学者の支援」について、ライフイベントへの対

応や、これに関する国際協力を含めて特別講演をされた。

続いて「女性科学者に明るい未来をの会」の古在由秀会長より、賞状および副賞の賞金が贈呈され、森郁恵さんが記念講演をされた。森さんとお茶の水女子大学の四年間クラスメイトであり、遺伝学研究室で卒業研究を共にした仲でありながら、当時自主ゼミ・サークル活動として取り組んでいた女性問題・ジェンダー研究の方に転じてしまった私は、もはやその内容の詳細を理解しえなかったが、遺伝子から細胞、神経系、感覚、行動までをダイナミックに貫く新たなパラダイムの研究であることは了解できた。

その後の懇親会では、赤松良子元文部大臣が、猿橋賞の意義を讀え、女性研究者・科学技術者と男女雇用機会均等法等の基本的な問題と深くかわる、猿橋賞に触発されて、ご自身が退職金を基に、女性差別撤廃条約の履行推進や普及に貢献した女性を顕彰する赤松賞を創設されたこと等をお話された。

すすくと育ち、国内のみならず国際的にも一流の研究者となった森さんに、役割モデルを見、個人的にパワーをもらうとともに、自然科学系の研究や技術の担い手に見られる性別バイアスを除去していくために、総合的で体系的

な意図的働きかけが必要であることを痛感した。(内藤和美)

反改憲・反基地・反安保の大きなうねりを！ 6・4怒りの大集会

六月四日、東京中野ZERO大ホールで、一〇人の発起人、一二七の個人と団体の呼びかけ、二二二団体と個人の賛同のもとに開かれたこの集会は、会場前に多くの私服が黒めがねをかけて見張るなど異常な雰囲気だったが、一〇二〇名の参加者であふれ、呼びかけどおりの「大きなうねり」を生んだ。

「日米協力のトリックに乗るな」

最初に口火を切った土屋公献さんは、「日本は、アメリカの言う〈不安定の弧〉〓中国からイラクに至る世界戦略上の重要地点に平行して弓形に太平洋に浮かんでいる島。在日アメリカ軍の再編成は、日本の自衛隊と司令部を一つにして、米軍の下に日米の軍隊を一本化し、日本の国土・人民・お金・物資のすべてをアメリカに捧げる体制作り。米軍は〈自衛隊という日本軍〉を利用することはない。太平洋戦争で硫黄島を米軍が、日本を守ることはない。太平洋戦争で硫黄島を米軍が

襲った時も、肌の黒い兵隊を先に上陸させ、彼らが死んで、もう安全という状態になって白人兵が上陸するのを目撃した。アメリカが日本を守ってくれるわけではない」と、自らの体験に基づいて激白。

「イラクで使われている劣化ウラン弾の恐怖」

続いて〈核兵器廃絶をめざすヒロシマの会〉共同代表の森滝春子さんが、イラク戦争開戦前と開戦直後の二度にわたってイラクを訪れたビデオを上映、劣化ウラン弾の放射能被害の残酷さを具体的に納得させた。

「改憲すれば、自分たちの〈安全〉を守れなくなる」

海勢頭豊さんのミニコンサート「月桃」「喜瀬海原」に続いて登壇した全日本海員組合設立部長、藤丸徹さんは、「九九年の周辺事態法以来、中立系の二〇単産が結集して抵抗運動を続けてきたが、周辺事態法も有事法則も通ってしまった」と強調。二〇〇四年三月二〇日、イラク南部のバスラ港で、日本の三〇万トン級の巨大タンカーが自爆テロに攻撃されたが、緊急出航したという〈知られざる危機〉を公表。「憲法九条が変えられたら、世界の海の安全航海も不可能になる。あらゆる労組・市民団体が一致して、改憲を行わせないよう行動しよう」と、力強くアピール。

続くバネルディスカッション「在日米軍基地再編に反対して」では、嘉手納・普天間軍基地一坪反戦地主の宜保幸男さん、日米軍事再編・基地強化と闘う全国連絡会共同代表の金子豊貴男さん、ストップ改憲全国ネット2006の新井智さんの三人が報告。

宜保さんは「劣化ウラン弾一万発以上の投下練習が沖縄の小さな島で行われており、嘉手納基地の弾薬庫にはサリンなどの毒ガス弾や劣化ウラン弾があり、原子爆弾もあると信じられている。兵力を八千人減らすというのも数字のまやかし。司令部要員はいなくなるが、家族を含めて四万五千人の海兵隊員の数は変わらない」と、熱い訴え。

続く金子さんは、「今回の米軍再編は、日米軍事再編にすぎない」と、スライドを使って「横田基地に、航空自衛隊の元締め、航空総司令部を持ってきて、日米両空軍が一体になる。キャンプ座間にはアメリカ本国から陸軍第一軍司令部が来て、陸上自衛隊の中央即応集団の司令部を置く。横須賀には、在日米海軍司令部と米第七艦隊司令部、海上自衛隊の艦隊司令部があり、自衛隊と米軍の陸・空・海三軍の司令部の一体化、市民には銃口を向けている」と強く警告。

新井さんは、座間や相模原では、「黙っていれば一〇〇年たつても基地の街」をスローガンに運動しているが、「(2+2)は、アメリカの世界支配戦略に日本をまるごと奉仕させる計画を現実化した。憲法改悪も教育基本法改悪も共謀罪新設も、すべて日本を《戦争のできる国》にするための布石」と、鋭く分析。

続くリレー発言も、「原子力空母の横須賀母港化を絶対阻止」「早大構内の立看撤去闘争中」など、若い意見が続出、会場は一段と活気づいた。

最後に発起人の森井真さんから、「滅私奉公時代の日本は、人間性を無視し、戦争協力者を養成した。二度とあの時代には戻さない」と強いメッセージ。久しぶりに参加者全員が高揚した「大きなうねり」を感じた。(鈴木京子)

五千人がカナダにつどつた 世界平和フォーラム

六月二三日から二八日まで、第一回世界平和フォーラム(WPF)がカナダのバンクーバー市で開かれ、九四か国、約五千人の人びとが世界から集まりました。

WPFは、「戦争を終わらせ、平和、公正で持続可能な世界をつくる」ことをテーマに、世界のNGOとバンクーバー市平和正義委員会が呼びかけた国際会議です。

全体会やワークショップは三五〇にも及び、初日のピーク・ウォークは、一万五千人が参加する、にぎやかなパレードとなりました。市内二箇所から出発したデモは、途中で合流しサンセットビーチで集会。行進中、道行くバスや車からパレードに呼応してクラクションが鳴り、そのたびに大きな歓声がわき、日本では見られない風景です。

話題となったのは、パレードにも参加したシンディー・シーハンさん。

二〇〇四年四月に息子をイラクで亡くし、以来、ブッシュ大統領に「なぜ、息子は死んだのか、理由を聞かせてほしい」とホワイトハウス前にテントを張り、座り込みを続けたシーハンさんの話は、国民である前に、母として人間としてのありようを問う話で、「私の悲しみは、イラクで子どもたちを失ったお母さんたちの悲しみと同じだ」と語り、大きな感動を呼びました。

今年が初めてのWPFの特徴のひとつは、カナダの教員組合からの参加が多かったことです。

カナダでは、イラクからの軍の撤退を要求する運動が成功し、いまはアフガニスタンからの撤退を求めていることが報告されました。

またコロンビア、イラク、パレスチナの組合の代表が参加した「戦争状態の国における平和を求める労働組合の闘い」では、戦火などの状況に加え、外国資本による民営化が進み、労働者の連帯をつくることが困難になっている現状が話され、女性の運動など社会運動と労働組合との連携を模索している、という報告がありました。一方、「戦争に反対するアメリカ労働者」という組織は、移民問題も含め何十万人もの人びとがブッシュの政策に反対して街頭行動をしていることを報告しました。

さらに特徴のもう一つは、シンデラー・シーハンさんもそうですが、アメリカの市民運動が元氣だったことです。シーハンさんや女優のサランドンさんなどが先頭になっている女性の反戦団体（ピンクコード）、9・11事件の犠牲となった家族の団体（ピースフル・ツモローズ）や退役軍人の会ほか多くのアメリカの市民団体が元氣な活動を紹介してくれました。

その中でも〈ピースフル・ツモローズ〉のケリー・キャ

ンベルさんの訴えは、心に響きました。

彼女たちのスローガンは「ノー・モア・ウォー」「ノー・モア・ヴィクティム」。――メディアは其実を伝えないし、大統領は会ってもくれず、埒があかなかったが、ハートで人間の心で、訴え続けた結果、アメリカでは9・11の直後とはうってかわって、ブッシュの戦争に反対する声が大きくなり、支持をえるようになった。ワシントンの公園に、イラク戦争で亡くなった兵士の数だけシユーズを並べ、「ただ犠牲者を出せば気がすむのか」と訴えたそうです。すべてのイベントを網羅することはできませんので、最後に、画期的なことをお知らせします。

日本からは約二〇〇名が参加しましたが、それぞれの団体、個人が日本の9条の大切さをアピールしました。その結果と言ってもいいでしょう。最終日に採択された平和アピール「平和の構築に向けて」の中で、「日本の9条をモデルに、各国の憲法に『戦争の放棄』の条文を入れよう」という項目が盛り込まれたのです。

閉会式の最後では、〈ピース・ポート〉が、活気あふれる「よさこいソーラン」踊りと沖縄の「エーサー」を踊り、フォーラムを閉じました。

（木瀬慶子）

来年の参院選では大逆転を！ 7・7シンポ

神保町の地下鉄を出ると、「7・7会場は、こちら」とビラを手渡す人があちこちに。「今日の集会は必ず成功！」と思つたとおり、会場の一橋教育会館は開幕前から超満員。湯川れい子・佐高信・上原公子・川田悦子・斎藤貴男の五氏をパネリストに、きくち・ゆみさんの司会で始まったパネルディスカッションは、パネリストが「女性が男性の二倍」という珍しい編成。

戦争で父と兄を失つた湯川さんは「失つて怖いものは九条だけ」と訴え、佐高さんは「こういう運動は無党派がよくて政党はダメという考えでは広げられない」と持説を披露。斎藤さんは「近く中小経営者の九条の会ができる」と吉報を伝えました。

「弱者として無党派でたたかった体験」を切々と語つた川田さんの話は、ジンと心にしみましたし、上原さんのお話は、来年の参議院選の、大きな参考になりました。「政党に降りてもらつて勝利した市長選の現実」を歯切れよく報告。

人選も、それぞれのお話も、すばらしく感動しました。続いて、いま人気の神田香織さんの講演に一息ついた後

の、全国各地からの平和共同候補擁立の状況報告は、ヒロシマ・岡本三夫、大阪・山元一美、徳島・藤田恵美、沖縄・金城睦、岡山・矢山有作、東京・内田雅敏の皆さんが続々登壇して力強い発言。この取り組みがすでに確かな基盤を築いていることを物語る迫力に満ち、「来年」への大きな希望を抱かせました。

〈平和共同候補〉への動きは、これまで何回も試みられながら実現しませんでした。来年こそは結実し、参議院選で現実成果を挙げるだろうと、期待できる会でした。これに続く第二・第三弾の集會に期待しつつ、「来年こそは……」と、久しぶりに希望に満ちて家路につきました。

(斎藤まゆみ)

第六回 東アジア女性フォーラム

第六回東アジア女性フォーラムが、七月一八―一九日、北京・中国人民宮殿ホテルで開催された。

一九九四年に、九五年の北京會議の準備をかねて、第一回フォーラムを（あごら）や松井やよりさんなど、メキシコ會議以来、世界女性會議に参加してきた人びとの呼びか

けで、江の島の神奈川県立かながわ女性センターに合宿しての話し合いから出発した、このNGOフォーラムは、以降、九六年ソウル、九八年ウランバートル、二〇〇〇年台北、〇三年香港、そして今年の北京と会を重ね、朝鮮民主主義共和国以外は、東アジアの国や地域を一巡した。

今回は、北朝鮮が初めて参加。朝鮮民主女性同盟の副代表はじめ三人が、金日成バッチをつけて参加。

日本からは二四人、韓国からも主な二つの女性団体連絡協議会を中心に三〇人が参加したが、台北からは、二〇〇〇年に第四回のフォーラムを開催したグループからではなく、中国政府に近い女性企業家二人が参加したのみだった。香港も前回フォーラムを開催した女性センター関係者ではない、香港政府委員会関係者、マカオからは、商工会議所女性部などのエリートが参加。中国国内からは、約二〇〇人、フォーラム全体として三〇〇人以上の参加者で行われた。

一日目は開会行事と全体会。中国国家評議会女性・児童委員会副委員長が開会挨拶をし、〇九年に第七回を主催する日本のコンタクトポイントである城西国際大学女性学ジエンダー研究センター和智綏子さん（水田宗子学長代理）

が参加者を代表して、第一回目からの精神に基づいて行いたいと挨拶。引き続き、中華婦女連合会副会長が中国女性の現状について報告した。

各国代表の報告は、日本からは、板東真理子さん、韓国からは鄭鉉栢韓国女性団体連合常任代表が、グローバリゼーションの負の影響について数字をあげて具体的に報告。

宣誓文の検討会には、各国二名の参加が認められ、日本から原ひろ子さんと、国信潤子さんが参加した。

二日目は、①政治参加の機会と女性のチャレンジ ②経済発展における女性の機会とチャレンジ ③マクロな社会開発へのジェンダー主流化 ④政治における女性の役割とその他の基本的条件の確立 ⑤社会保障と女性 ⑥男性優位という固定概念と伝統の撤廃 の六つの分科会が開かれ、三時からの全体会で宣誓文案を提示、採択された。

〇九年は二巡目として日本で開催する予定。

今回はプロセスや、台湾・香港などの参加者選定など問題は多かったが、これらを克服して、三年後の日本大会は、この会を始めた原点に戻り、草の根の女性団体の協力で、民意のあふれた会としたい。

（小俣光子）

若者で大にぎわい 第三回東京平和映画祭

映画館やテレビではなかなか観られない、戦争や環境破壊の根本原因を捉えた映像を厳選して上映するこの映画祭は、ボランティアだけでつくる手作りの映画祭です。

今年は三回目で、七月二二日に開かれ、国立オリンピック記念青少年総合センターの大ホールは、約九〇〇名の人びとで賑わいました。

朝一〇時から夜の九時まで、六本の映画が次々と上映され、何本観ても同じ値段。二六歳以上の会員なら二五〇〇円、二五歳以下の会員なら一五〇〇円と、お得な価格設定も若者が集まりやすくできています。

上映された順に、タイトルを書きます。「リトルバーズ」(綿井健陽監督)、「ジャマイカ楽園の真実」(ステファニー・ブラック監督)、「魔法のランプのジニー」(ステイーブン・ソター、トレース・ゲイナー監督)、「六ヶ所村ラブソディ」(鎌仲ひとみ監督)、「平和の創り方」(きくちゆみ、今村和宏、田中優)、「映画・日本国憲法」(ジャン・ユンカーマン監督)。

それぞれがすばらしい映画ですが、中でも今年のハイライトは、アメリカの中学生二人が創った「原爆」ドキュメンタリー「魔法のランプのジニー」。作品は一六分と短いですが、最初に原爆をつくった科学者への直撃インタビューなど、わかりやすく感動的な映画です。上映の前日までピース・ボートの招きで日本にいた彼らが、テレビ・ラジオなどで話題となった効果もあり、会場には朝から若者が大勢詰めかけました。

これまで、平和をテーマにした映画会には、どちらかというと高齢者が多いのですが、この東京平和映画祭は、第一回目から若者が大勢集まっています。そしてボランティア・スタッフは、若者から高齢者まで三世代が、共同作業し議論して映画祭をつくりあげています。

プロデューサーは、翻訳家であり、平和・環境活動家である、きくちゆみさん。彼女のリーダーシップと、大きくつつむ人間性、そして平和のネットワークが、この映画祭の持ち味です。きつと平和運動の新しい風になっていくでしょう。ちなみに、来年も、今年と同じ場所、七月七日に開きますので、今年、来られなかった方は、ぜひ、来年お越しください。

(木瀬慶子)

(社)大学婦人協会(JAUW)主催

ジェンダー問題を考えるシンポジウム

—高等教育の視点から—

＜ジェンダー問題＞を根本から考えるシンポジウムです。なぜジェンダーの視点が革新的なのか、バッシングの実情はどのようなものか。今、私たちができることは何か？ 皆で知恵を出し合い発信する場に、ぜひご参加ください。

日時: 10月14日(土) 10:20~16:00

場所: 津田塾会本館5F 5-10教室(300席)

基調講演 浅倉むつ子氏 (早稲田大学法科大学院教授)

「学術の世界にとってジェンダーの視座はなぜ重要か」

10:30~12:00

パネルディスカッション 「＜ジェンダートラブル＞をめぐって」

13:00~16:00

★パネリスト★

山下 泰子氏	ジェンダー法学会・理事長 文京学院大学教授(東京支部会員)
佐々木政子氏	日本女性科学者の会会長 東海大学総合科学技術研究所教授
嶋 茂代氏	明浄学院高等学校非常勤講師 国語担当(大阪支部会員)
高田 武子氏	岡山市収入役(岡山市男女共同参画副本部長)(岡山支部会員)
山極 清子氏	(株)資生堂人事部次長(男女共同参画担当)
北村 節子氏	読売新聞東京本社調査研究部主任研究員

コーディネーター 鷺見八重子 (JAUW副会長 和洋女子大学教授)

参加費: 1000円 (学生500円)

氏名、住所、電話番号、所属を明記のうえ、FAXでお申し込みください。

たくさんの方のご参加をお待ちしております。

(社)大学婦人協会(JAUW)

〒160-0017 新宿区左門町11番地6-101

TEL 03-3358-2882/FAX 03-3358-2889

ホームページ <http://www.jauw.org>

e-mail: jauw@jauw.org

歌と映像と証言 によるつどい

横井久美子メッセージライブ

今——ヒロシマ、ナガサキ、ベトナム

1945年8月、原爆投下により広島と長崎の町は、生き地獄と化しました。そして、アメリカは対日作戦に準備した枯葉剤を、1961年から10年余ベトナムに散布し続けました。原爆投下も枯葉剤散布も、アメリカによる民間人無差別ジェノサイドです。核兵器と化学兵器の被害は、何世代も続き、今も人々を苦しめています。歌と映像と証言を通して「人類はこれ以上戦争をするな!」の声を広げましょう。

横井久美子

国立音楽大学声楽科卒。行動するシンガーソングライターとして国内をはじめ世界各地で活躍。1973年、戦争中のハノイを訪れ、最近では毎年、枯葉剤被害の子どもの運命を歌う。05年5月、ベトナムから「国際平和友好勲章」を受ける。同年8月、スイスの女性団体「ノーベル平和賞を1000人の女性に贈る委員会」より推薦され、「1000人」の一人にノミネートされた。同年7月、CD「にんげんをかえせ」をリリースし、原爆症認定集団訴訟を支援。



証言 片山文枝

練馬区在住。20歳の時、広島市東区西町で被爆。30人の東京原爆者と共に原爆症認定集団訴訟に参加。



映像 亀井正樹

ハノイ市の「平和村」の子ども達と出会って以来、枯葉剤の被害に苦しむ子供たちを取材。31回放映会で視点を受賞。日本写真家協会会員。

映像

絵本「こぎんことがあってよいかか」
寺山忠好(絵・文 長崎で被爆。近畿原爆症訴訟原告)

出演

安田雅司郎(ギター) 杉田真実(ヴァイオリン)
木村啓太郎(パーカッション) 尾藤恵山(R/B)

2006年11月23日(祝・木)

午後1時開場 1時30分開演

有楽町よみうりホール(03-3231-0551)

JR山手線・京浜東北線有楽町駅南「ビックカメラ」ビル7階

入場料 ●前売 2,500円 ●当日 3,000円

お申し込み tel 042-573-3465
fax 042-577-7410

■主催: 未来へ輝き隊 PROJECT30

〒186-0002 国立市東3-18-15 横井久美子事務所
URL <http://www.asahi-net.or.jp/~fg4k-yki/>
mail kagayakitai2002@yahoo.co.jp

■後援: ベトナムの枯葉剤被害者を支援する日本委員会
原爆症認定全国集団訴訟弁護団
原爆症認定支援全国ネット



photo: 亀井正樹

あーらのあーらのあーらのあーらのあーらのあーらのあーらのあーらのあーらのあーら

入会しました

科学に基づく新しい世界観で平和を提唱するアーヴァン・ラズロ博士に出会い、魅せられ、博士の「地球交響曲第五番」の自主上映会を二〇〇五年一月に文京区シビック小ホールで開催しました。大きな成功と支援を受けて、さらに同年三月「ラズロ博士講演会」を企画しました。

「一介の主婦が何と無謀なことを」と夫や両親があきれ、心配するなか、支援してくれる大勢の女性たちの力でラズロ博士のピアノ演奏、龍村仁監督との対談・質疑応答、「地球交響曲第五番」の上映など、欲張った企画をみごと実現、文京区シビック大ホールの二〇〇余名の聴衆を魅了しました。

講演会にかけつけてくださった小俣さんから「この大きな力をぜひ（あーら）にも」と誘惑されて入会しました。毎号の力強いメッセージを受け止め、ひとまわり大きくなったように思っています。

（東京 増田妙子）

305号を読んで

305号のジェンダーバッシングは、非常に興味深く拝見しました。教育基本法の不毛な議論の中で、極めてまともなディスカッションを拝見できて、ここちよかったです。

（東京 高山 智）

*

資金繰りが苦しいなか、305号も送付してくださり、申し訳ありません。

「今」の世界的問題の根本を衝いた、

久山先生の新連載を読みながら、日々少人数で格闘されている皆様のシンドラサを想起せずにはおられません。編集後記にも書いておりましたが、「ミニメディアの意地」を死守されておられる皆様の戦列に、なんとしてみつながっていたい思いでいっぱいです。

（兵庫 ヤマウチ）

*

「あーら」の貴重な紙面に、毎号つたない詩を載せていただいて、深く感謝申しあげております。

305号の特集「ジェンダーバッシング」まさに現在の問題で感激しつつ読みふけております。

（千葉 堀場清子）

*

六月一日、305号「ジェンダーバ

ッシング」が届きました。

一介の主婦の意見ですが、横文字をそのまま使うことの難しさを感じました。どうして日本人は日本語に訳して使わないのですか。私など日本語でさえ正確に思いを伝えられないのに、さらに曖昧な外来語を使う風習について、どなたも疑問に思わないのでしょうか。

またこれはジェンダーという概念が、日本女性のすべてに浸透しているという前提でのバッシングということなのでしょう。私にはそうは思えません。もともと浸透していないのであれば、もっと浸透させる努力を女性全体で進めるべきではないですか。

バッシングという言葉にはマイナスイメージが付きまといます。使えば使うほど、相手方に有利に働くのでは、と危惧します。被害者意識でもの申すことには反対です。

来期の都知事選に優秀な女性を当選

させるような、地道な努力にこそ女性の力を結集すべきではないと思います。

そして孤軍奮闘している千葉県知事の堂本さんをみるにつけ、県議会議員に多くの女性を当選させなくてはいいけないと感じています。

バッシングを訴えるみなさん、どうぞ東京都の都議会議員、各県の県議会議員になって政治を動かしてください。そうしないことには解決しないのではないのでしょうか。

ちなみにUNDPの人間開発報告書(139頁)の件ですが、二〇〇五年度の報告書では、さらに順位が下降し、人間開発指数11位(前年9位)ジェンダー開発指数14位(前年12位)ジェンダー・エンパワーメント指数43位(前年36位)となっています。

小泉チルドレンの効果も薄かったよ

うです。ね。

(千葉 野村三枝子)

305号がベストセラーに

305号「ジェンダーバッシング」が、大阪ドーンセンター内「ウィメンズブックス ゆう」で八月のベスト5の売り上げですと、知らせがありました。二五年前、一万五千部も売れた特集25号「女と戦争」のようなブームは望めませんが、これがきっかけで、「あごろ」も、売れる「あごろ」になると、うれしいのですが……。

事務所開設・移転

銀座に事務所を開きました

一九九七年にミネバ法律事務所の設立に参画し、約九年にわたり同事務所にて業務を行ってまいりましたが、このたび、加城千波弁護士との共同事務所を開設いたしました。

「ミネルバ」はローマ神話の知恵と武勇の女神ですが、ギリシャ神話ではこの女神を「アテナ」と呼びます。

ミネルバ法律事務所が培ってきた高い評価を少しでも継受するべく、新事務所の名称は「アテナ法律事務所」と冠しました。

女性や子どもたちの人権の確立をめざして、より専門性の高い法律業務の提供をめざしてまいりたいと思います。名刺や封筒の印刷、テープ反訳など弁護士業務に関連する仕事は、BOCに発注し、大変助かっています。皆様どうぞお立ち寄り下さい。

Tel 03-5550-3611
Fax 03-5550-3617

(東京 林 陽子)

事務所が移転しました!

新しい事務所(オフィス未来)は、
鹿児島市荒田1-16-11-403に。

交通局電停から二〇秒、交通局バス停から五秒で、超便利です。

電話とFAXは移転前と同じです。

(鹿児島 小川みさ子)

皆さん、お元気ですか?

昨年の9条フェスタのことが9条連のホームページに取り上げられていて『あごら』のスタッフが写真に出ていましたね。四月に事務局を訪問した時のことを思い出しました。

これから暑さが厳しくなりますが、違いを認めあい、好き嫌い主義を克服しながらがんばりましょう。

(宮崎 二宮チヌヨ・義広)

*

『あごら』をお送りいただき、ありがとうございます。小泉政治が五年間無茶苦茶をやった今だからこそ、日本国民の一人ひとりに読ませたい記事

が満載され、大変感銘を受けました。「黄土高原の小さな村の性暴力」に関する記事など、小俣さんの幅広い活動を初めて知り、敬意を表します。

シベリア抑留問題も、何かの形で、お手伝いできれば、と思っております。

(東京 白井久也)



(東京 中村道子)

京都暮らしも二四年目、暑くて寒いところですが、山をながめ、のんびり暮らしています。(京都 中山紀代子)

グッド・アイディア?

阿倍サンがソーリになったら、道路のゴミをポリ袋に入れて、官邸に送りましょう!(あごろ福岡)

その時のメッセーじは、「日本を美しい国にするために」(あごろ新宿)

ニュースに思う

つらかった報道

秋田の小さな町で起きた幼児殺し。たしかにショッキングな事件ではありましたが、連日のマスメディアの報道は、常軌を逸しているように見え、つらい毎日でした。

私自身は、その第一報を病院の待合室の週刊誌で知りました。

小さな彩香ちゃん、母親のところに男の友人が来ると外に出されていたとか、朝食をつくらないので、食事抜きのことが多かったとか……。それは、取材に回った記者たちに、近所の人が、さまざまな情報を流したことを推測させ、傍観していた人びとの目の陰しさに、ショックを受けました。

畠山容疑者が拘留されてからのテレビ報道は、さらにすさまじいものでした。公開された高校卒業ノート、畠山容疑者へのメッセーじは、「売春婦になるなよ」など、目をそむけたくなるものばかり。

テレビ局は多分、同級生から手に入れたのでしょうが、渡した級友に、心の痛みは、なかったのでしょうか。高校の先生は、それを黙認なさったのでしょうか。——日本の、小さなムラには、今も《恐怖の共同体》がある……

と感じた日々でした。

秋田は人情の深さで知られる地方です。私の父が愛してやまなかった故郷でもあります。それだけに、目をふさぎ、耳をふさぎたい毎日でした。

共同体って、何でしょうね。

メディアって、何でしょうね。

考え続けたいと思っています。

(斎藤千代)

おすすめ

大好評「蟻の兵隊」

終戦当時、中国の山西省にいた陸軍の兵士五九〇〇〇人のうち二六〇〇人がポツダム宣言に違反して武装解除を受けることなく中国に残留。戦後四年の間も国・共内戦に従軍させられた。その真実を明らかにするため中国に通い続ける元残留兵士の奥村和一(80)さんは、軍の命令で残留させられた犠牲

者としての怒りとともに、かつて新兵教育の名の下に無辜の中国人を刺殺した加害者でもあったことに気づき相克。「日本軍山西省残留問題」の真相

解明に孤軍奮闘する奥村さんの姿を追ったドキュメンタリー『蟻の兵隊』は、大好評。東京・大阪・名古屋に加え、全国各地の劇場上映も決まりました。

検索は、<http://arinoheita.com>で。

(東京 小俣光子)

【編集後記】



◆〇四年医師の国家試験の三割に女性が合格との記事がありました。女性は産婦人科医・小児科医に多いのですが、医療現場の医師は家庭と仕事の両立を続けていくことが困難です。東京女子医大で支援室を設置したことは、朗報

です。経験豊かな女性の医師が多くなることを願います。

(Y)

◆本屋さんを覗いたら「脳に活性化ぬりえ」のコーナーが。八八歳の知人に敬老の日のプレゼントに買い求めた。色鉛筆を添えて持つて行くと、とっても喜び、目が輝いた。ホッとした。介護現場にも「ぬりえ」が取り入れられているようです。

(G)

◆この号がお手許に届く頃は中国山西省の大娘(おばあさん)たちを訪ね、モンゴル人に救われて育てられ、モンゴル人として戦後を生きた「中国残留日本人孤児」の足跡を追って北京からハイラルに飛び、内モンゴルの草原で日中の戦後を考えていると思います。十二月八日刊行予定のあごら「開戦六五年」の特集は私なりに思い入れてる号。多数の方の原稿を期待してお待ちしています。

(光)

◆らいてうのご遺族から、うれしい土地贈与のお話。それを受けて、ほんとうに「らいてうの家」を実現できるだろうか……。『実現したい』気持ちのなかで、米田さんは、ずいぶんお悩みになった、と仄聞しました。

「らいてうの家」は、女たちの志と行動に加えて、それに感動した地元男性たちや、業者の方がたの実行もブラスされて、見事に不可能を可能に変えました。その喜びを全国の皆さまと共有したくて、表紙をカラーにしました。美しいみどりの中の、木の香の薫る家で、久しぶりにへあごら全国大会を開きたいと祈っています。

(千)

二〇七号の編集協力者

天野尚美／荻原有希／小野良子

小俣光子／黒澤照代／郷原さつき

斎藤千代／斎藤 涼

「あごら」は、人と人が出会うひろば——

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……心おきなく話し合える仲間がいる。——そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える——「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊『あごら』の誌代込みで月額七〇〇円(在学中の方は三五〇円)。一年分(八四〇〇円、学生の方は四二〇〇円)前払いが原則ですが、半年分でも二か月分でもご相談に応じます。入会金は二、〇〇〇円(学生の方は無料)。ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

「BOC」の登録もどうぞ……

一九八〇年に生まれた「BOC」バンク・オブ・クリエイティビティは、
「創造力の銀行」。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。
各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな
「創造力」でも歓迎！ ただし、半年以上「あごら」会員の方に限ります。

〒160-0022 東京都新宿区新宿一―九―四 中公ビル

電話 03・3354・3941 代表 FAX 03・3354・9014

Eメール XLV05467@nifty.com ちたぼc@mb.infoweb.ne.jp

ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

あごら 307号(7・8・9月合併号) らいてうの家 信濃に誕生

●編集 あごら新宿 ●発行 2006年9月20日 ●印刷 藤田印刷(株)

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル3F

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV 05467@nifty.com

●定価 本体1,000円+税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部

橋本勝さんの絵本が
またできました。

BOC 出版部

ISBN4-89306-161-5

C0036 ¥1000E

定価 本体1,000円+税



9784893061614



1920036010004

21世紀の世界に 9条はおすすめです 800円+税

START ↓



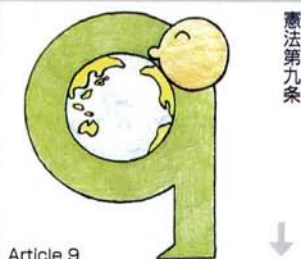
Or use force

又は武力の行使は、



To International Peace

国際平和を



Article 9

憲法第九条



As a means of settling

国際紛争を



Aspire.

誠実に希求し、



We Japanese, old and young and cats

①日本国民は、



International disputes

解決する手段としては、



The sovereign right of the nation

国権の発動たる戦争と



With justice

正義と



We kick out forever

永久にこれを放棄する



To threaten

武力による威嚇



And order in mind.

秩序を基調とする